

学内広報

for communication across the UT



130TH

THE UNIVERSITY OF TOKYO

特集：

130周年記念事業のつくりかた

—みんなで祝う130周年—



2007.1.17

No. 1350

平成19年4月12日（木）に本学は創立130周年を迎えます。これに先立って、昨年11月11日（土）ホームカミングデイ歓迎式典の中で、創立130周年記念事業開始宣言が行われました。

ところで、「記念事業っていったい何？」とか「どうしたら参加できるの？」と思っている学内の方も多いのではないのでしょうか？

そこで、法人化後では初となる、この記念すべき創立130周年事業実施委員会の委員長である濱田純一理事・副学長にお話をうかがいました。



濱田 純一
(はまだ じゅんいち)

理事・副学長
創立130周年記念事業
実施委員会委員長



まず、130周年記念事業のコンセプトを具体的に説明いただけますか？

濱田 過去にも100周年120周年という形で周年事業は行なわれましたが、今回の130周年記念事業は「東大が法人化して初めての周年事業である」ということと不可分であり、それが最大の特徴です。そういう意味で、過去の周年事業とかなり違うイメージの事業だと思います。現在、本学は「新しい時代に向かって変化している状況」にありますので、「新しい東大の姿を130周年記念事業で人々に伝えること」をテーマとして打ち出すのが一番良いだろう、と。そう考え始めた時に、ちょうど小宮山総長のアクションプランなどで「時代の先頭に立つ」というコンセプトが出ているので、使わせてもらうことにしました。過去を振り返るよりは「これから東京大学が何をするか」ということを訴えたい。そして、「事業のための事業」ではなく、「この事業をきっかけにして東大の次の姿・次の時代を支える考え方が見えてくれば面白い」と思っています。



今回の周年事業は「未来をどう作るか」ということがテーマである、と。

濱田 そうですね。しかも、法人化後は「基盤になる制度」が変わっているわけですね。今までは、従来の大学システムを前提にして教育・研究はどうあるべきかを考えれば良かったんですが、今回の場合は未来を考える際に基盤のところから考え直さなければいけないということが大きな特徴だと思うんです。「基盤になる制度を変えつつ、未来をどう設計していくか」ということ。そのあたりもアピールしていきたい。



「国民と社会からの負託を再確認する」ということも挙げられていますね。

濱田 これは、広い意味では大学の説明責任と関係していると思うんです。今までも大学の説明責任はあったんですが、法人化以降、一層、「どういう教育・研究をやっているか」という姿を社会に対して示す必要がある。「法人化して、より大きな自由とより大きな責任を担うことになった」とよく言われますが、自立した大学になった分、それだけ「社会

東京大学創立130周年記念事業
シンボルマーク&キャラクター
紹介！



今回、130周年記念事業を行うにあたって、シンボルマークとキャラクターが公募されました。正式に採用されたマークはいわゆる「プロ」の作った作品ですが、集まったマーク・キャラクターのうちそれぞれ優秀な3点ずつが、入選作品として表彰されています。

おなじみの公式シンボルマークの他に、まだまだ知られていないこれらの入選作品についてもご紹介します。



丸尾 圭祐さん



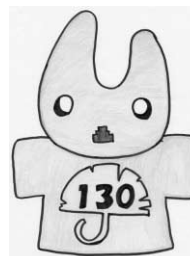
小石澤 泰子さん



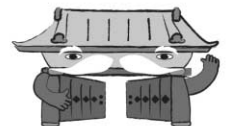
築紫 一夫さん



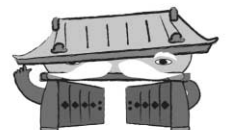
Gustoff (ガストフ)
宮崎 彩さん



U-Tan (ウータン)
市村 桃子さん



赤門爺 (あかもんじい)
溝口 照康さん



から何を負託されているか」をきちんと考えなければいけない。そのような「東大としてのアイデンティティ」をこの事業で外に向かって表現していくことが大切だと思っています。



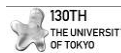
「共に語り合う機会」を作るための事業という意味合いも大きいですか？

濱田 そうですね。そのためには「自己満足ではない」ということと、「一方向の語りかけではない」ということが大切です。ただ、大学が何かを与えるということではなく、双方向で互いにベネフィットを得られる事業ができれば良いと思う。通常のシンポジウムもそういう場だと言えますが、130周年記念事業では、もっと学際的な事業であったり、企業や市民と連携してやるものであったり、若い人々や子供達と一緒にやるものであったりしてほしい……考えてみれば、そういう様々な事業は、すでに部局でやっていることが多いですね。だから、「130周年のために新たに本部で企画します」というよりも「部局が持っている自発性」をうまく事業全体のコンセプトに結び付けていくという発想をとりたいと思っています。部局の事業を130周年に意味づけて広報していく作業……あまり本部中心にせず、各部局の多様性を上手く組み合わせられると面白いな、と。まさに総長のおっしゃる「自律分散協調系」です。各事業の内容に関しては特に限定しないつもりですが、あえて、「こんな事業をやってほしい」という思いを言うならば……職員も学生もやってほしい。国際的な連携もとりながらやってほしい。女性の問題やバリアフリーの問題なども積極的に取り上げてほしい。「東大の多様性」を強化するようなものを望みます。同窓会にも、「ぜひ企画を」とお願いしています。



130周年記念事業として認可された事業には、どんなサポートを？

濱田 まず、「広報のお手伝い」ができます。パンフレット制作などの費用を上限50万円という枠で負担しようと思っています。外国から人を呼んできたりする費用は自前でやっていたりとして、学内で会場を借りる場合の会場費用なども負担できます。50万円程度の経費とは言っても、捻出に苦労する場合がありますから。



すでに行なわれたいくつかの130周年記念事業を見て、ご感想を。

濱田 全体に東大らしい国際性がある事業が多かったと思います。そういうものをきっかけに「世界的な知のネットワーク」や「学生・職員とのかかわり」を広げていってほしいですね。また、それだけで終わらずに「未来のタネをまく」ようなものになっていくと良いと思います。



「知のプロムナード」構想に関しては？

濱田 総長が「事業をやって、後に残るものを」とおっしゃっていますが、「知のプロムナード」も後に残るもののひとつですね。恒久展示ですから。他に、物理的に後に残っていくものとして、「建物の竣工」も130周年記念事業イベントのひとつと位置づけています。たとえば、再来年の2月頃に竣工する情報学環の福武ホール。再来年の3月まで130周年記念事業はやりますから、後に残るものの典型的な例のひとつとなりますね。



シンボルマークが決まった経緯、シンボルマークと入選マークの位置づけは？

濱田 130周年記念事業はできるだけ「参加型」にしたいので、マーク・キャラクターの公募が良いと思ったんです。今回は学内公募と専門家が作ったものと両方を対象にして、一番良いものを選ぶということでやりました。結果としては専門家の作品がシンボルマークに選ばれたわけですが、同時に、入選マークなども「セットとして使って行こう」ということを考えています。また、入選マークのシールができないかと思っています。紙バッグなどに、ペタペタと貼れるように。入選したキャラクターでマスコットを作れるとおもしろいと思うんですが……集まってきたマーク・キャラクターの解説がとても良いですよ。東大にとって大事なことは何かをそれぞれ考えて書いてくださっているから。



では、最後に、130周年記念事業に応募しようと思っている皆さんにメッセージを。

濱田 認定審査に関しては、あまりうるさいことは言わずに、どんどん認定していきたいと思っています。まずは逡巡せずに応募してみてくださいですね。

＜2007年1月4日 濱田理事室にて＞

**130モニュメント
「知のプロムナード」**

130周年記念事業の一環として、「知のプロムナード」構想があります。これは、「東京大学アクション・プラン2006 VI-4-2（研究成果を活用した知的プロムナードの整備）」に掲げられている、創立130周年を記念して本郷、駒場、柏、白金台の各キャンパスに、学生や教職員がくつろげる語らいの空間を130カ所（この数字は象徴的意味）設け、誇るべき歴史や研究成果を活用したストーリー性をもつ「知のプロムナード」とする構想です。



写真左：
駒場コミュニケーション・プラザそばの芝生でくつろぐ人びと

写真右上：三四郎池（左）と山上会館庭園内の有馬朗人先生の句碑（右）

＜写真はイメージです＞



昨年末から1月16日（火）まで、各部局において候補地となりうる場所（基本的には屋外ですが、屋内も可）の推薦をお願いしていました。ご協力ありがとうございました。

今後、候補地を決定したのちに、そこをどのように利用するかについて、アイデアを公募することになっています。

＜暫定的な数＞

- ・本郷 75
- ・駒場 35
- ・柏 15
- ・白金台 5

「知のプロムナード」は、130周年記念事業が終わっても続く恒久的なものであり、本学の大きな軌跡となることでしょう。

この企画に、ぜひ皆さんのアイデアを生かしてみませんか！？

問い合わせ先：総務部広報課（内線:22031）

開催された企画

昨年11月11日（土）の開始宣言からこれまでに開催された130周年記念事業は、国内外の有識者をお招きして行われた東京大学第1回プレジデント・カウンシルをはじめとして、国際性豊かな企画や社会との連携を重視した企画が目立ちました。

全て英語で行われる講演会などでは、いつにも増して真剣な眼差しで聴講する方々が多く見られます。また、講演後には積極的に質問が飛び交い、本学の教育・研究の水準が世界レベルであることを実感することができました。

こうした事業をきっかけに、本学から「世界的な知のネットワーク」がますます広がっていくことが期待されています。



インド・フォーラム出席者の方々（平成18年11月14日）
熱弁をふるうマクニリー会長（平成18年12月5日）

平成18年（既に開催された企画）

| | |
|---------------------|---|
| 11月11日（土） | 東京大学創立130周年記念事業 開始宣言（安田講堂） |
| 11月14日（火） | 東京大学インド・フォーラム （小柴ホール） |
| 11月15日（水） | 東京大学第1回プレジデント・カウンシル （本部棟） |
| 11月17日（金） 18日（土） | 社会科学研究所 「世界における社会科学的日本研究の 現状と展望」（小柴ホールほか） |
| 11月18日（土） | 朝日新聞社共催 「知の拠点サミット」（安田講堂） |
| 11月18日（土） 19日（日） | 東洋文化研究所公開講座 「アジアを知らば世界が見える ーアジアの暦」（経済学研究科棟） |
| 12月4日（月） | 「知の構造化」ワークショップ （小柴ホール） |
| 12月5日（火） | サンマイクロシステムズ スコット・マクニリー会長講演会 （工学部2号館） |

開催中の企画

| | |
|-----|--|
| 開催中 | 総合研究博物館特別展示 「東京大学コレクションー 写真家上田義彦のマネリスム博物誌」展 ※1月28日（日）まで |
|-----|--|

130周年記念事業への参加企画を募集中！！

130周年記念事業では、教職員や学生をはじめとして、あらゆる本学関係者に積極的な参加を呼びかけています。募集する企画の内容は、シンポジウム、展覧会などの学術的なものに限りません。本誌を手にした方々で少しでも関心を持った方は、ぜひアイデアを出して事業に参加してみてくださいいかがでしょうか？

●参加手順

- ①創立130周年記念事業実施委員会に企画書（予定企画の名称、概要、実施時期、担当者等が記載されたもの）をメールで提出
（提出先は、下記お問い合わせ先のメールアドレス）
- ②審議で適当と認められれば、認定

●参加企画のメリット

- ・シンボルマークの使用ができる
- ・130周年記念事業ホームページのイベントリストに掲載
- ・学内での開催の場合、会場費は実施委員会負担
- ・広報のためにポスター等を製作する場合に費用援助
- ・その他、要望に応じて、原則として合計50万円を目途に費用援助
- ・シンボルマーク入りの紙バッグ類を必要に応じて提供

今後の予定

平成19年（2月～4月の日程の確定している企画のみ）

| | |
|--------------------|---|
| 2月1日（木） | 社会科学研究所創立60周年記念講演会 （弥生講堂・一条ホール） |
| 2月3日（土） | サステナビリティ学連携研究機構(IR3S) 国際研究型大学連合(IARU)公開シンポジウム 「資源と環境が支える地球と人類の未来」 （安田講堂） |
| 2月17日（土） | 情報学環・学際情報学府：シンポジウム 「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文 書館ー連携に果たす大学の役割」 （弥生講堂・一条ホール） |
| 2月21日（水） 22日（木） | 農学生命科学研究科： 食の安全研究センター設立記念シンポジウム 「食の安全科学最前線」（仮） （弥生講堂・一条ホール） |
| 3月1日（木） ～9日（金） | 東京大学運動会ヨット部 世界選手権出場(メキシコ) |
| 4月14日（土） | 生命科学教育支援ネットワーク： 東京大学の生命科学シンポジウム （安田講堂） |
| 4月14日（土） | 東洋文化研究所特別公開セミナー |

（今後の各種記念行事等については、学内広報、ホームページ上で随時ご案内する予定です）

創立130周年の記念式典は、11月10日に安田講堂にて開催いたします。式典の行われる11月前半を記念事業週間として、日中委員長会議、プレジデント・カウンシル、東アジア4大学フォーラム等さまざまな行事を予定しております。

問い合わせ先：
創立130周年記念事業事務局
E-mail:130ut@adm.u-tokyo.ac.jp

NEWS

一般ニュース

人事部

今年度の定年退職教員は58名

一般

平成19年3月31日をもって本学を定年により退職される予定の教員（講師以上）は、下記の教授53名、助教授2名、講師3名の計58名です。

（平成19年1月9日現在）

| 部局 | 職名 | 氏名 |
|-----|----|----------------------|
| 大・法 | 教授 | 伊藤 眞 |
| 大・法 | 教授 | 落合 誠一 |
| 大・法 | 教授 | CH'EN PAUL HENG-CHAO |
| 大・医 | 教授 | 井原 康夫 |
| 大・医 | 教授 | 加我 君孝 |
| 大・医 | 教授 | 高橋 智幸 |
| 大・医 | 講師 | 金子 義保 |
| 大・工 | 教授 | 大場 善次郎 |
| 大・工 | 教授 | 鎌田 元康 |
| 大・工 | 教授 | 河野 通方 |
| 大・工 | 教授 | 塩谷 義 |
| 大・工 | 教授 | 長澤 泰 |
| 大・工 | 教授 | 仁田 旦三 |
| 大・工 | 教授 | 藤原 毅夫 |
| 大・工 | 教授 | 湯原 哲夫 |
| 大・工 | 講師 | 小川 敏恵 |
| 大・文 | 教授 | 桜井 由躬雄 |

| | | |
|-----|-----|--------|
| 大・文 | 教授 | 藤田 一美 |
| 大・文 | 教授 | 平野 嘉彦 |
| 大・理 | 教授 | 梅澤 喜夫 |
| 大・理 | 教授 | 西郷 薫 |
| 大・理 | 教授 | 長田 敏行 |
| 大・理 | 教授 | 奈良坂 紘一 |
| 大・理 | 教授 | 浜野 洋三 |
| 大・理 | 教授 | 和達 三樹 |
| 大・農 | 教授 | 會田 勝美 |
| 大・農 | 教授 | 阿部 宏喜 |
| 大・農 | 講師 | 鈴木 誠 |
| 大・養 | 教授 | 浅島 誠 |
| 大・養 | 教授 | 跡見 順子 |
| 大・養 | 教授 | 石井 明 |
| 大・養 | 教授 | 太田 浩一 |
| 大・養 | 教授 | 川合 慧 |
| 大・養 | 教授 | 竹内 信夫 |
| 大・養 | 教授 | 谷内 達 |
| 大・養 | 教授 | 宮本 久雄 |
| 大・養 | 助教授 | 植田 直志 |
| 大・育 | 教授 | 佐藤 一子 |
| 大・育 | 教授 | 土方 苑子 |
| 大・育 | 教授 | 矢野 眞和 |
| 数理 | 教授 | 松本 幸夫 |
| 創域 | 教授 | 大森 博雄 |
| 医科 | 教授 | 澁谷 正史 |
| 医科 | 教授 | 高津 聖志 |
| 医科 | 教授 | 竹縄 忠臣 |
| 医科 | 教授 | 御子柴 克彦 |
| 地震 | 教授 | 阿部 勝征 |
| 社研 | 教授 | 平石 直昭 |
| 生研 | 教授 | 榎 裕之 |
| 生研 | 教授 | 高木 堅志郎 |
| 物性 | 教授 | 高橋 實 |
| 物性 | 教授 | 高山 一 |
| 海洋 | 教授 | 太田 秀 |
| 海洋 | 教授 | 小池 勲夫 |
| 海洋 | 教授 | 寺崎 誠 |
| 海洋 | 助教授 | 石井 輝秋 |
| R I | 教授 | 卷出 義紘 |
| 産学 | 教授 | 安田 浩 |



研究協力部

APRU遠隔教育とインターネット2006国際会議
APRU Distance Learning and the Internet (DLI)
2006 Conference

環太平洋大学協会（APRU）と東大の共催で、APRU遠隔教育とインターネット2006国際会議を11月8日（水）～10日（金）に弥生講堂で開催した。本会議は、文部科学省、メディア教育開発センター、東アジア研究型大学協会（AEARU）の後援を得て実現された。

8日と9日の午前は、小宮山総長による本会議のメインテーマである「ITによる、グローバルな知の体系化」についての基調講演、AEARU会長のChan-Mo Park学長、スタンフォード大学SCILセンターのRoy Pea所長、慶應義塾大学の安西塾長、メディア教育開発センターの清水理事長の招待講演が行われた。この基調講演と招待講演は、希望が多いことから、映像をコンテンツ化して会議のウェブ（<http://apru2006.dir.u-tokyo.ac.jp/>）から視聴可能とする予定である。

8日と9日の午後は、投稿された中から査読により選択された50件の論文の発表と活発な質疑討論が行われた。発表された論文は上記の会議のウェブからアクセス可能である。また、13社の企業展示があり、セッションの合間などに意見交換が行われた。

10日には見学会が催され、学内キャンパスツアーの後、江戸東京博物館、さらに秋葉原の本学情報理工学系研究科拠点と産業技術総合研究所を訪問した。

ITを活用した遠隔教育の会議であることもあり、会議録はUSBメモリに格納して配布した。また、登録参加者の名札は、インターネットラウンジに設けたPCを使うためのICカードとなっており、PCは会議録の参照やメールのやりとりのために利用されて、好評であった。

参加者は23カ国から270名であったが、本会議は会議後のアンケートでも極めて高く評価された。



小宮山総長による基調講演の様子



研究協力部

統括プロジェクト機構
「知の構造化ワークショップ」を開催

12月4日（月）に本郷キャンパス理学部1号館中央棟小柴ホールにて、「知の構造化ワークショップー知の構造化ツールは、新しいサイエンスを開くのかー」が開催された。いろいろな分野の研究者を対象とした本学創立130周年記念事業の一つで、司会は岡村定矩理事・副学長とCOEプログラム推進室長矢野正晴教授。

最初に小宮山宏総長が講演を行ない、膨張の世紀である20世紀に学術が細分化し、そのために社会が知の統合を要請しており、その解として知を構造化し、課題解決先進国「日本」になることが必要であると語った。

続いて、知の構造化の応用研究について、情報理工学系研究科の辻井潤一教授が「論文・データの共有から知識創造プロセスの共有へ」と題し生命科学文献データベースMedlineを例にとりあげ、また、工学系研究科の岡部篤行教授が「知の構造化ツールとしてのGIS（地理情報システム）」と題し、知の構造化には泥臭い仕事を支える仕組みが必要であることを述べた。



講演する小宮山総長

そのあと、学術統合化プロジェクト《ヒト》の関連で、国立遺伝学研究所の大久保公策教授が「ライフサイエンスにおけるゲノム情報の高度利用に向けた生命知識の構造化」につき、課題解決には洞察を助ける技術としてのデータベースと、それを使って考える方法が必要であると語った。また、学術統合化プロジェクト《地球》の関連では、生産技術研究所の安岡善文教授が「地球観測データの統合的処理」について、境界を広げ新たな体系を創るためには、学問分野の領域の拡大と連携が必須であると述べた。

休憩を挟んで後半には、情報基盤センター山口和紀教授、気候システム研究センター長中島映至教授、工学系研究科長松本洋一郎教授、工学系研究科工学教育推進機構美馬秀樹特任助教授、それに理学系研究科黒田真也教

授が、それぞれの専門の立場からコメントし、社会の問題と専門知との関連付けや、あらゆる知識を瞬時に応用できる人材育成の必要性などにつき、参加者全員で活発な議論が行なわれた。



岡村理事・副学長（左）の司会で進められた討論

今回のワークショップの参加者は、それぞれの分野のトップクラスの研究者と大学院生が中心で、平成18年4月に駒場キャンパスで学部1～2年生を対象に行なわれた「学術統合化プロジェクト《ヒト》《地球》合同シンポジウム」などとは一味違うイベントとなった。小宮山総長も質問や議論に終始参加、熱弁をふるった。

説明後、各委員の方々から貴重なご意見をいただきました。次回は平成19年の夏に開催される予定です。



総長からの柏国際学術都市支援会設立のお礼及び祝辞



堂本千葉県知事のあいさつ

施設部

柏国際学術都市支援会が発足

一般

12月18日（月）、千代田区のパレスホテルパールシルバールームにおいて、第1回「柏国際学術都市支援会」が開催されました。本支援会は東京大学及び千葉大学が広く産業界に呼びかけて発足したものであり、つくばエクスプレス線柏の葉キャンパスを中心とする一帯を「柏国際学術都市」として整備するために、企業の方から意見、アイデアをいただくことを目的としています。

支援会は趣旨に賛同する企業のトップ14人により構成され、会長にはキッコーマン株式会社の茂木友三郎会長が就任されました。

この日の議事は、西尾理事が司会進行を務め、柏国際学術都市支援会の茂木会長、小宮山宏東京大学総長、古在豊樹千葉大学学長、堂本暁子千葉県知事からのご挨拶に続き、大矢禎一・新領域創成科学研究科副研究科長が、「柏国際キャンパスプラン」について、UDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）北沢センター長が、「柏の葉キャンパスタウン・アーバンデザインセンター」について、千葉大学天野理事が「環境健康都市の創造に向けて」について、それぞれ構想の概要説明を行いました。

「噴水」のコーナーに投稿を！

「噴水」のコーナーは、本学の学生や教職員にかかわる様々な出来事を、皆様からの投稿によるコラムとして紹介するコーナーです。

「教職員の有志でこんな活動をしています」、「本学の学生や教職員が学外のイベントでこんな活躍をしています」などなど、部局としての公式ニュースとまでは言えないけれど学内のみなさんに是非お知らせしたい、そんな情報があれば、是非積極的に「噴水」のコーナーに記事をお送り下さい。

<原稿の送付先・問い合わせ先>
総務部広報課

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
TEL : 03-3811-3393 内線 : 22031

12月21日（木）、大講堂（安田講堂）において、2006年度業務改善「総長賞」表彰式が業務改善プロジェクト推進本部の主催で開催されました。本年度から、「教職員提案課題」に加え、新たな取組として、職員が課題を設定し自ら改善に取り組む「自律改善課題」の募集も行い、昨年度を上回る122件の応募がありました。

厳正な審査の結果、以下のとおり、総長賞（海外研修）1件、総長賞（国内研修）1件等計7件が表彰されました。また、最も応募件数が多く、業務改善に組織的に取り組んだことが高く評価された医学部附属病院事務部には、今回特別に設けられた総長特別賞が授与されました。



表彰式に引き続き、小宮山総長が「東京大学の目指すところと職員の使命」と題して職員への講話を行いました。「本質を捉える知」「他者を感じる力」「先頭に立つ勇氣」を持ち、これからの東京大学の方向性とそれとともに進む東京大学職員がどうあるべきかについて、職員への期待を熱のこもった言葉で語られ、職員一人一人が改めて決意する場となりました。

また、総長賞受賞者、業務改善プロジェクト推進本部長賞受賞者によるプレゼンテーションが行われ、好評のうち終了し、来年度に向けての取り組みが期待される内容でした。

なお、当日は300名を超える教職員が参加し、表彰式をともに祝いました。

○ 総長賞（海外研修）

「柏キャンパス高圧ガスボンベ一括管理体制の構築」

物性研究所低温液化室及び放射線管理室

（代表者：土屋 光）

○ 総長賞（国内研修）

「日常業務（固定資産会計）に関するマニュアルの配布」
財務部資産課資産会計・管理チーム
（代表者：河本 裕文）

○ 総長特別賞：医学部附属病院事務部

○ 業務改善プロジェクト推進本部長賞（自己研鑽費用補助）

「e-ラーニングシステムを利用した特定業務従事者健康診断問診手続きの構築」

医学部附属病院総務課労働安全担当

（代表者：塚田 博明）

「データベースソフトを利用した各種許可書の自動発行システム等の構築」

研究協力部総合研究博物館グループ

（代表者：土屋 雅史）

「看護師募集訪問に関する旅行命令（精算）業務の簡素化」

医学部附属病院旅行命令検討グループ

（代表者：立野 雅敏）

○ 企画調整役賞（コミュニケーションセンター商品）

「旅費計算書の取扱の簡素化」

教養学部等事務部経理課経理係

（代表者：武田 いづみ）

「短時間勤務有期雇用教職員等に係る労働条件通知書等の公印省略」

医学部附属病院総務課人事労務チーム人事管理担当

入江 宜孝



物性研究所低温液化室及び放射線管理室による
プレゼンテーション



研究協力部

独立行政法人物質・材料研究機構と
連携協力の推進に係る協定書調印式
が行われる

12月22日（金）10時から本郷キャンパス本部棟12階中会議室において、本学と独立行政法人物質・材料研究機構との間で、連携協力の推進に係る協定書調印式が行われました。

本学からは小宮山総長が、物質・材料研究機構からは岸理事長が出席し、調印式に臨みました。

既に両機関の間では、ナノテクノロジーとバイオテクノロジーの融合分野の拠点形成を目指すプロジェクトをはじめ、多くの共同研究や人材交流が行われていますが、この度の連携協定の締結を機に、高度な研究設備の共用を進めるなど、ナノ、バイオ分野でのイノベーション創出に向け、両機関一体となった取組が進められる予定です。

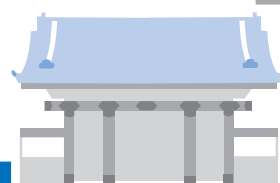


署名した協定書を提示する
岸理事長（物質・材料研究機構）・小宮山総長



固く握手をする岸理事長・小宮山総長

部局 ニュース



生産技術研究所



生産技術研究所千葉実験所公開
開催される

11月10日（金）、生産技術研究所千葉実験所公開が開催された。30研究室による26研究テーマの一般公開をはじめとして、特別講演、招待講演、研究成果報告会、デモンストレーション、ガイドツアーなどが行われた。生産技術研究所先進モビリティ連携研究センター（ITS）のITS実験用交通信号機の点灯式、生産技術研究所同窓会パーティーも当日開催された。

当日は天候にも恵まれ、西尾茂文理事・副学長の「スーパーリーグの中での東京大学と生産技術研究所」を題とした特別講演、第2工学部卒業生でいらっしやるリンナイ株式会社内藤明人会長の「成熟産業において如何に変化に対応し、次の発展を考えるべきか（ガス器具産業を例として）」と「日本の若者の学力及び技術力の劣化改善への考察」を題とした招待講演、横井研究室の研究成果報告会には多くの聴衆が集まった。魚本研究室のコンクリート構造物の非破壊検査に関する研究発表、須田研究室の鉄道車両模型による運動制御実演、堀研究室による電気自動車のデモンストレーション及び試乗、浦研究室による海中ロボットのデモンストレーションは多くの見学者で賑わっていた。



西尾茂文理事・副学長の特別講演



リンナイ株式会社内藤明人会長の招待講演

今年の来所者数は前年度を上回る約650人で、公開関係者を合わせて約800人が公開に参加した。恒例となった近隣小・中学校生徒を対象とする見学会には、千葉市立弥生小学校、轟町小学校、緑町中学校から243人が参加した。平成16年の公開から続けている一般来所者向けのプログラムが定着しつつあり、近隣学校や地域住民などの一般の方の来所が年々増加している。今後も企業からの参加者に加えて、一般来所者向けのプログラムも拡充して行く必要があると思われる。

次回の生産技術研究所千葉実験所公開は11月9日(金)に開催される。



近隣小・中学校生徒を対象とする見学会

社会科学研究所

国際ワークショップ「世界における社会科学的日本研究の現状と展望」を開催

部局

社会科学研究所は、11月17日(金)および18日(土)の2日間の日程で、「世界における社会科学的日本研究の現状と展望」をテーマとする国際ワークショップを開催した。

社会科学研究所は、かねてより、世界の社会科学的日本研究の拠点としての役割を果たしてきたが、東京大学創立130周年、社会科学研究所創立60周年、社会科学研

究所附属日本社会研究情報センター創立10周年のこの機会に、世界各国の第一線で活躍する日本研究者を招聘し、各国における社会科学的日本研究をめぐる最近の動向について幅広く意見を交換するとともに、今後の研究の方向を展望することが、この国際ワークショップの目的であった。

初日の17日の午後には、理学部1号館小柴ホールを会場に、一般公開のシンポジウム「今なぜ日本研究か:社会科学の視点から」を開催し、17日午前および18日午前・午後には、社会科学研究所大会議室を会場に、3つのワークショップを開催した。2日間の日程を通じて、外国からの招待参加者、社会科学研究所関係者のほか、学内・他大学の関係者、日本で研究中の外国人研究者、国際交流基金その他関係機関の担当者など、延べ120名が参加し、活発な議論が展開された。



公開シンポジウム風景

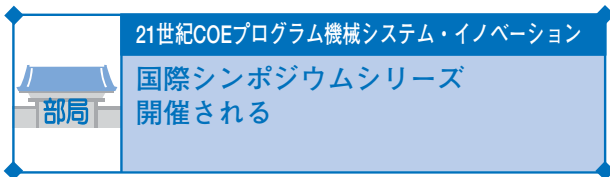


公開シンポジウム討論風景

各国の参加者からは、近年の一般的傾向として、日本の社会・経済・政治モデルに対する世界の関心が相対的に低下しており、このことが、各国の日本研究の制度上・財政上の環境にも深刻な影響を及ぼしていることが指摘されたが、他方で、日本一国を研究対象とするのではなく、中国や韓国をはじめ東アジア諸国との比較や関係という観点から改めて日本を位置づけなおすという新しい動きや、国家(政府)だけではなく市民社会に着目した研究の必要性、カルチュラル・スタディーズとの連

携の可能性など、今後の社会科学的研究のさまざまな方向が積極的に模索されたことが印象的であった。

さまざまな困難と可能性が交錯する中で、世界の社会科学的研究の発展にどのように寄与することができるのか、その拠点としての社会科学研究所の意義と役割が改めて確認された2日間であった。



機械システム・イノベーション国際シンポジウムシリーズが11月22日（水）から28日（火）までの7日間にわたって開催されました。

このシリーズでは、「International Symposium on Structural Reliability in Energy Systems Innovation ～信を極める～」は1日、「The 3rd International Symposium on Innovative Aerial/Space Flyer Systems ～翔を極める～」および「The 3rd International Symposium on Biomedical Systems Innovation ～體を極める～」の国際シンポジウムがそれぞれ2日間ずつの会期で行われました。

シリーズは笠木伸英拠点リーダーによるオープニングアドレスによって開幕し、21世紀COE機械システム・イノベーションの最近の活動内容、及び今後の活動計画の紹介が行われました。3つの国際シンポジウムではいずれも、国内外から著名な研究者を招聘し、各分野における最先端の研究に関して、活発な情報交換と意見交換が行われました。また、本COEプログラムに参画している博士課程学生をはじめとする若手研究者によるミニオーラルプレゼンテーションおよびポスターセッションがそれぞれのシンポジウムで行われ、若手研究者の積極的な参加が目立ちました。



笠木拠点リーダーによるオープニングアドレス

<International Symposium on Structural Reliability in Energy Systems Innovation ～信を極める～>

「International Symposium on Structural Reliability in Energy Systems Innovation ～信を極める～」は、11月22日（水）に農学部弥生講堂一条ホールにて開催されました。本シンポジウムは、エネルギーシステムにおける構造信頼性を目指した、(1) Operation & Maintenance for Structures, (2) Advanced Simulation for Nano-, Micro-, Macro-Structural Reliability, (3) Structural Reliability of Innovative Aerospace Composite Systemsに関するものでした。

本COEプログラムのエネルギーイノベーションの構造物信頼性に関する研究成果を発表するとともに、Charles Becht IV (Becht Engineering Co., Inc., USA), Seyoung Im (Professor, Department of Mechanical Engineering, Korea Advanced Institute of Science and Technology, Korea), Naoki Takano (Professor, Department of Micro System Technology, Ritsumeikan University, Japan), Adrian P. Mouritz (Professor, Discipline Head of Aerospace & Aviation, School of Aerospace, Mechanical & Manufacturing Engineering, RMIT University, Melbourne, Australia), Yutaka Iwahori (Dr., Advanced Composite Technology Center, JAXA, Japan) を招聘し、最先端の研究成果について講演頂きました。さらに、学生による30名程度(26名)のポスター講演・議論やデモンストレーション実験は、招聘者の活発な参加により盛り上がりました。幅広い分野の最先端研究に触れることができ、大変意義のあるワークショップとなりました。

<The 3rd International Symposium on Innovative Aerial/Space Flyer Systems ～翔を極める～>

「The 3rd International Symposium on Innovative Aerial/Space Flyer Systems ～翔を極める～」は、11月24日（金）、25日（土）に浅野キャンパス武田先端知ビル武田ホール5Fにて開催されました。本シンポジウムは、革新的飛行システムの実現を目指した、(1) MAV (微小飛行ビークル)、UAV (無人飛行ビークル)の研究開発、(2) 宇宙エネルギー利用、および(3) 基礎研究に関するセッションがそれぞれ2つずつ設けられました。本COEプログラムの革新的飛行ロボットプロジェクト、エネルギーイノベーションプロジェクトの宇宙エネルギーサブプロジェクトおよび基礎研究に参加する研究者・学生を主体に企画されました。両分野での本COEプログラムにおける研究成果の発表が行われました。

H. Jin Kim (Seoul National University, Korea), Cees Bil (RMIT University, Australia), Eric N. Johnson (Georgia Institute of Technology, U.S.A.),

Agnes Luc Bouhali (ONERA, France), Sang H. Choi (NASA Langley Research Center, U.S.A.), Yeves Ribaud (ONERA, France), Norbert Mueller (Michigan State University, USA) を招聘し、最先端の研究成果について講演頂きました。さらに、学生による30名程度(27名)のポスター講演・議論やデモンストレーション実験は、招聘者の活発な参加により盛り上がりました。

<The 3rd International Symposium on Biomedical Systems Innovation ~體を極める~>

「The 3rd International Symposium on Biomedical Systems Innovation ~體を極める~」は、11月27(月)、28日(火)の2日間に渡り浅野キャンパス武田先端知ビル武田ホール5Fにて開催されました。本シンポジウムは、Cellular Biomechanics, Cell/Tissue Culture Technologies, Computer-integrated Robotics Surgery, Computational Biomechanics, Engineering Synthesis with Medicineの5つのセッションが設けられました。Prof. Zhu (Georgia Inst. of Tech.), Prof. Takeo Matsumoto (Nagoya Inst. of Tech.), Dr. Eric Leclerc (Univ. of Compiegne), Prof. Naruse (Okayama Univ.), Prof. Fujie (Waseda Univ.), Dr. Naohisa Kamiyama (Toshiba Medical Systems), Dr X. Yun Xu (Imperial College of London), Prof. Masaaki TAMAGAWA (Kyushu Inst. of Tech.), Prof. Sugimori (New York Univ.) の講演者から本領域における最新情報が提供されると、会場からも熱心に質疑が相次ぎ、活発な議論が行われました。さらに、本COEプログラムに参画している博士課程学生がショートプレゼンテーションおよびポスターセッションを行い、招聘者との活発な討論が展開されました。



会場の様子

大学院農学生命科学研究科・農学部
 附属農場で「東大農場収穫祭 with 西東京アースデイ 2006」開催

11月23日(木・勤労感謝の日)少し薄日が差す曇天と12月中旬を思わせる肌寒さの中、附属農場(西東京市)において、初めて市民への公開形式の収穫祭が、西東京アースデイと共催で開催された。

収穫祭は、宮中行事の新嘗祭と同様に、今年の農産物収穫への感謝を表す食育の根源ともいえる行事だが、今回はそれに加えて、附属農場の任務の三本柱である教育・研究・社会貢献のそれぞれの活動を広く知ってもらうことを目的に行った。内容は、農場の概要と研究紹介、農場所蔵の貴重書物展示、農業機械の展示及び試乗会、餅つき、芋煮・みかん・柿の振る舞い、農場及び演習林見学ツアー、公開セミナー「食をめぐる問題」、バイオディーゼル燃料(BDF)使用トラクタによる耕うん実演、昭和12年築の学生宿舎公開などであった。また、共催した西東京市アースデイは「みどりを残そう、育てよう!」をテーマに、農業・環境関係NPO等の展示、大凧揚げ、こども奉納相撲、フリーマーケットなどを行った。このような多種多様な催し物に約5,000人が来場した。



中央：案山子と農産物のオブジェ
 左上から時計回りに：ゲート・トラクタ試乗・公開セミナー・餅つき
 背景：餅つき・芋煮の振る舞い会場の賑わい

公開セミナーで活発な議論を展開した農家の方々、貴重書物を熱心に閲覧する方々、トラクタやコンバインの運転を満面の笑みで楽しんだ子供たち、つきたてのお餅や熱々の芋煮の味を堪能した大勢の方々と、参加の仕方や楽しみ方はさまざまだったが、事故もなく来場者には大いに喜んでいただけたものと思う。今後も入学式・卒業式に相当する本研究科の重要行事として、内容の充実を図っていきたい。

なおこの行事は、西東京市、東大農場のみどりを残す

市民の会、西東京菜の花エコ・プロジェクト、西東京市職員労働組合の後援と、西東京青年会議所の協力を得て開催された。関係各位に感謝申し上げる。

大学院農学生命科学研究科・農学部

外国人留学生見学旅行を実施

部局

農学生命科学研究科・農学部では、11月30日（木）、12月1日（金）の両日、恒例の1泊2日の外国人留学生見学旅行を実施した。今回は特別に會田研究科長の参加があり、外国人留学生50名、引率の佐々木国際交流室長、長戸、作田の両室員及びニーラム講師、秩父演習林の説明役として山本博一教授と職員9名、合計65名で大型バス2台での見学旅行となった。

弥生キャンパスを出て、中央道を通り、石和、甲府を経て最初の目的地の附属秩父演習林に到着した。雁坂トンネルを抜けたところにある演習林のワサビ沢展示室は2階建ての山小屋ロジック風の立派な建物である。ツキノワグマの剥製を見ながら昼食を済ませ、荷物運搬及び作業用のための乗用モノレール（運転手プラス4人）の体験乗車をさせてもらい、外国人留学生たちはかなりの斜度を上り下りするモノレールに歓声をあげていた。



ワサビ沢展示室前の広場で

その後、演習林内の樹木園を案内してもらった。樹木園は、ワサビ沢からバスで少し移動した国道140号線沿いに散策しやすいように道が整備されたもので、皆はブナや朴の落ち葉を踏みながら歩いた。両側の樹木には「森の里親制度」によるラベルが付けられ、同行の會田研究科長も、久々に里子の樹木に対面されていた。「森の里親制度」とは、10万円出すと樹木の里親になることが出来、名前のプレートがその樹木のそばに立てられるという制度である。荒川の源流に近い山々を樹間に眺めながら、演習林の職員の説明を聞いて1時間ほど散策を楽しんだ。

その後、樹木園から1時間ほどバスで移動して秩父郡小鹿野町の宿に到着した。その夜は、夕食を兼ねて懇親会を行った。テーブル毎におしゃべりの花が咲き、食後はジェスチャーゲームなどで大いに盛り上がり、この旅行のもう一つの目的でもある親睦を大いに深めた。



樹木園入口の前で

お天気は1日目の午後から良くなり、2日は、サングラスがほしいくらいの快晴に恵まれた。小川町にある紙漉き体験の工房では和紙作りの工程の説明の後、実際に全員が紙漉きに挑戦した。木枠を前後・左右に均等にゆするのを見た目ほどには簡単ではない。工房の人が手を添えてくれ、食後、工房を出発するときには乾きあがり、それぞれ自分で漉いた紙を持ち帰ることができた。ここは、工房以外にも、紙漉きの道具や各種の農具などを展示した資料館、実際に紙漉きが行われていたわらぶきの民家や2階建て和風建築の食堂などが敷地内に円形に配置され、中央の半分は砂利の広場、残りは池を配した日本庭園で情緒にあふれている。絶好のお天気なので、あちこちで外国人留学生はカメラを構えてお互いに写真を撮り合っていた。

ここで昼食をとった後、バスで少し移動して酒造見学となった。入り口でまろやかな原水を味わい、数種類の利き酒をした後、実際に工場内を見学した。おかみさんの英語での説明があったので、外国人留学生も日本酒の製造工程が大変良く理解できたと思われる。

予定の行程を全部つつがなく完了し、ケヤキやイチョウの褐色・黄色、ところどころに混じる楓の紅色に彩られた晩秋の関越道の景色を楽しみながら、一同は週末の混雑にも巻き込まれずに無事に農学部キャンパスに戻った。

公開シンポジウム「死の臨床をささえるもの」報告

12月2日（土）、21世紀COEプログラム「死生学の構築」（DALs）と「人文社会系研究科・応用倫理教育プログラム」共催の公開シンポジウム「死の臨床をささえるもの」が、医学部鉄門講堂で開催された。

高橋和久教授（本研究科長）の挨拶に引き続いて、まず医学部名誉教授で終末期医療が専門の大井玄氏が、「生きること」は同時に「死にゆくこと」であると指摘した上で、昨今の傾向を批判的に分析・報告した。

続いて評論家の芹沢俊介氏は、「経験」の観点から死を3つに分類し、死の持つ問題性がケアの実経験としてどう働いているか、といった点に言及した。

次に作家の田口ランディ氏は、死の臨床の問題を靈性立ち上がりの場と結びつけ、ターミナル・ケアの臨床現場にその役割を求めた。

最後に島蘭進教授（本研究科・宗教学）は、過去の死を特別視しない態度を紹介してその可能性を論じ、欧米で一般的な死だけを取りあげる学ではなく、Death and Life Studies、つまり死と生の「つながり」を考える学を目指すべきではないか、と、本COE21世紀プログラムがこれまで取り組んできた「死生学の構築」プロジェクトの拠点リーダーとして総括的にまとめ、あらためて提言した。

竹内整一教授（本研究科・倫理学）の司会で行われた全体討議では、そもそも「死の臨床」とは何か、生から切り離された死だけを特化して問うことの意味、「ささえ・ささえられること」の捉え直しの必要性、等々、多くの議論がなされた。

本シンポジウムはおよそ4時間にわたって行われ、会場いっぱいに集まった市民の方々より、積極的なご意見・ご質問が多数寄せられ、こうした問題に対する一般の関心の高さをあらためて確認することになった。本シンポジウムの模様は、平成19年後半期に発刊予定のシリーズ「死生学」（全5巻、東大出版会）の1巻に収録されることになっている。



医学部・文学部の連携で開催、会場は医学部の鉄門講堂

国際シンポジウム「精神医療と触法行為の死生学—殺人行為をめぐって—」報告

12月9日（土）、COE「死生学の構築」の大詰めを締めくくるイベントの一つとして、国際シンポジウム「精神医療と触法行為の死生学」が法文2号館1番大教室にて開催された。

シンポジウムは2部構成で、午前11時に始まったジル・ピーエイ教授（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）の特別講演は、「Insanity and Responsibility: Does M'Naghten do Justice to the Manifestly Mad?」と題され、いわゆる「マクノートン・ルール」は、それが当然適用されるべき「明らかに異常をきたしている触法者」に対して適正に適用されているか、という問題を扱った（司会、本研究科助教授一ノ瀬正樹）。

13時40分からの午後の部は、熊野純彦助教授の挨拶で始まり、第一の提題は聖学院大学所属の犯罪精神医学の専門家である作田明氏が行った。作田氏は、精神障害者の触法行為とその処遇の実態について詳細に論じ、医療設備の充実化などを訴えた。二番目の提題者は弁護士の八尋光秀氏で、障害者施設の現状などを紹介しつつ、精神医療ユーザーに対する誤った認識を改めることで、多くの問題を改善できる、と主張した。

次に、総合研究大学院大学の長谷川真理子教授が、「殺人の進化的生物学的分析」と題して生物学の観点から提題を行い、多くの興味深い論点を展開した。

次に一ノ瀬正樹助教授（本研究科・哲学）が、「害」の発生に対し「修復的司法」の観点をとり、確率的な考慮を加え、健常者の犯罪と連続的に対処してゆくべきことを提起した。

これらに帝塚山学院大学の小田晋教授、および司会兼コメンテータである加藤尚武本COEプログラム特任教授のコメントに引き続いて、活発な質疑応答が行われた。最後に島蘭進教授（本COEプログラム拠点リーダー）が閉会の辞を述べ、さまざまな問題性をあぶり出すことに成功したシンポジウムが終了を迎えたのである。



ピーエイ教授は英国の事情を紹介しつつ基調講演を行う



100名を超す聴衆がつめかけ、熱い議論に耳を傾けた

ミニ・シンポジウム「聖なるイメージ—死後の世界とのコミュニケーションの—手段として」報告

12月16日（土）13時半からDALSによるミニ・シンポジウム「聖なるイメージ」が開催された（本研究科美術史学研究室共催）。主催者側20名に加え一般の聴講者60名ほどで、まずまず盛会であった（一部同時通訳付き）。

ゲアハルト・ヴォルフ教授（フィレンツェ、ドイツ美術史研究所長）の"Divine Bodies, Sacred Images and Holy Sites. Contact Zones between the Living and the Death, between Heaven and Earth in Christian Cultures"と題した講演では、地中海古代文化で死者の彫像や画像が聖なる領域に参入し、これが葛藤を伴いつつ、キリスト教文化に継承されたことが論じられ、多くのスライド画像や中世後期の文字資料を援用して、聖画像が公衆との相互交渉の中で様々に生動化した事例が紹介された。そして14、15世紀は、ヴェラ・イコンの生産にみるように、芸術が「神的な力」によって感覚的、精神的な緊張を追求したイメージと信仰の魅力的な交渉と相互作用の時代であったと結論づけた。

次に奥健夫氏（文化庁文化財調査官）の講演「仏像と人体」では、仏像内に火葬骨を納入した事例などを挙げ、こうした納入の風習を仏教教義との関連から考察した。文化財調査官としての豊富な実地調査を背景としての実証的な議論の中でも、造像者による結縁交名の納入の増加と、構造技法および様式の変革に伴う仏像の呪術性の減退との関連付けは、とりわけ強い印象を与えた。

その後秋山聡助教授（本研究科、司会を兼ねる）による示唆に富む問題提起に続けて、1時間半余り議論が展開された。終了後に回収されたアンケートには、講演者各位の説得力のある主張や深みのある議論などに高評価が目立ち、成功裡に終わったと言えよう。



異色の顔合わせはCOE行事ならではの。両脇は通訳

大学総合教育研究センター

文部科学省先導的の大学改革推進委託事業
大学総合教育研究センター10周年記念・国際シンポジウム

大学総合教育研究センターは、設立10周年を迎え、記念シンポジウム「高等教育の費用負担と学生支援の国際的動向—日本への示唆(Worldwide Perspectives of Student Financial Assistance Policies: Searching Relevance to Future Policy Reform for Japanese Higher Education)」を、文部科学省先導的の大学改革推進委託事業の一環として、12月6～8日に開催した。

まず、12月6日（水）は東京国際交流館国際交流会議場にて国際シンポジウムを開催した（主催：東京大学大学総合教育研究センター／後援：日本学生支援機構・日本高等教育学会）。



1日目、シンポジウム。於：東京国際交流館

高等教育は世界的に大転換の時代をむかえ、我が国でも、公財政の逼迫の中、今までにない多様な学生が学習できる制度が求められている。そうした状況下で授業料・奨学金を中心とした費用負担および学生支援制度の充実が求められる。本シンポジウムでは、これらの点に

焦点づけ、各国の専門家を招き、各国の高等教育改革の状況をレポートするとともに、我が国の高等教育改革の道筋を探った。

おもな参加者は、クレア・カレンダー（ロンドン・サウスバンク大学教授<イギリス>）、丁 小浩（北京大学教授<中国>）、沈 紅（華中科学技術大学教授<中国>）、D・ブルース・ジョンストン（ニューヨーク州立大学元総長<アメリカ>）、クレイグ・マッキニス（メルボルン大学教授（広島大学高等教育研究開発センター客員教授）<オーストラリア>）、アレックス・アッシャー（教育政策研究所副所長<カナダ>）、金子元久（東京大学教育学研究科長）、芝田政之（国立大学財務・経営センター理事）などである（参加者約130名）。

続く12月7日（木）には、本学においてシンポジウムで提出された問題についてラウンドテーブルを設け、議論を行った。前日の発表について、質疑応答の後、とりわけ日本における教育費の親負担の重さについて、学生本人負担にシフトすべきかが焦点となった。学生本人の負担が重くなれば、進学を断念する者が増加することが懸念され、現在の貸与制奨学金（ローン）だけでなく、新しく給付制奨学金（グラント）を創設する必要があるのではないか、あるいは授業料免除を増やすべきかについて、意見が交わされた。さらに、ローンの回収について、各国で普及しつつある所得連動型ローンを日本で採用すべきかについても、多くの意見が表明された（参加者約45名）。



2日目、ラウンドテーブル。於:東京大学

3日目（12月8日（金））には、さらに広く学外の高等教育研究者も参加して、各国の高等教育改革の動向について、報告とそれに基づく質疑応答と活発な討論がなされた（参加者約30名）。

大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「三鷹市民と三鷹国際学生宿舎生との集い」開催される

12月9日（土）11時から、三鷹国際学生宿舎において、（財）三鷹国際交流協会との共催、三鷹市からの後援をいただき「三鷹市民と東京大学三鷹国際学生宿舎生との集い」が開催された。

この集いは、宿舎に居住する宿舎生、とりわけ約3割を占めている留学生と地域住民との交流を目的として毎年開催しているものであり、平成6年に第1回を開催して以来、今回で13回目となる。

集いは二部構成となっており、開始にあたって木畑洋一大学院総合文化研究科長・教養学部長及び清原慶子三鷹市長からの挨拶の後、第一部として著本春樹大学院総合文化研究科・教養学部助教授による「イチョウとソテツの精子発見に情熱を注いだ池野成一郎博士」と題した講演が行われた。朝から冷たい雨が降るあいにくの天候であったが、構内がイチョウで黄金色に染まるこの時期にふさわしい内容であったこともあり、約100名の三鷹市民等が聴講した。



清原慶子三鷹市長の挨拶



著本春樹総合文化研究科助教授の講演

講演後引き続き第二部開始までの30分ほどの時間で、(財)三鷹国際交流協会のご協力で、市名の由来ともいわれる鷹狩りの伝統を今に伝える、鷹匠による鷹の飛翔実演が行われ、参加者は鷹匠の合図で止まり木を飛び交う鷹の勇壮な姿に見入っていた。

13時からは第二部として、懇親パーティーが行われた。菊地弘(財)三鷹国際交流協会理事長の挨拶に続き、宿舎生を代表して、小松原孝文三鷹国際学生宿舎院生会幹事の乾杯の発声によりパーティーが開始された。パーティーの中では、(財)三鷹国際交流協会のご協力により、地元新川地区に伝わる「新川囃子」の演舞が披露され、参加者はおかめ、ひょっとこ、獅子等が太鼓や笛の音に合わせて踊る様子を楽しんでいた。さらに留学生が太鼓打ちの体験を行い、彼らは楽器の形状や音の違いに興味津々の様子であった。



「新川囃子」の演舞



懇親パーティー歓談の様子

パーティーは三鷹市民、三鷹国際交流協会会員、三鷹クラブ(旧三鷹寮OBの会)会員等に宿舎生も加わり約180名の参加者を得て、会場の共用棟ホール一杯に和やかな交流の和が広がっていた。

岡本和也宿舎生会委員長、本間長世元教養学部長からの挨拶の後、小島憲道大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長からの閉会の挨拶をもって、15時に集いは盛会のうちに終了した。

史料編纂所
 白露関係史料をめぐる国際研究集会を開催

12月11日(月)、史料編纂所(保立道久所長)と日本学士院の共催による「白露関係史料をめぐる国際研究集会」が開催された。

今回の取り組みは、史料編纂所の研究グループ(代表:保谷徹教授)による7回目の国際研究集会となり、ロシア連邦サンクトペテルブルグ市から、科学アカデミー東洋学研究所(サンクトペテルブルグ支部)のイリナ・ポポワ所長ら2名の専門家を招聘して行われた。



国際研究集会の様子

今回の研究集会では、まず有泉和子氏(史料編纂所学術研究支援員)から、史料編纂所がこの間新たに収集したロシア史料の分析をふまえ、「19世紀はじめの北方紛争とロシア史料:遠征の後始末——フヴォストフ・ダヴィドフ事件とロシアの出方」と題した報告が行われた。19世紀初頭、通商要求を拒否されたロシア使節レザノフは部下のフヴォストフらにサハリンなど日本の拠点襲撃を命じ、日露間の紛争となった。有泉氏はロシア海軍省史料などの読み込みの中から、一件がロシア側でどのように処理されていったのかを丁寧に明らかにした。

ついで、東洋学研究所のポポワ所長から、「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部(SPbF IVRAN)の東洋写本コレクション」と題して特別報告があった。ピョートル大帝以来の伝統をもつ同研究所のコレクションには、いわゆる敦煌文書をはじめ、10万点を超える貴重なアジア史料が所蔵されている。ポポワ氏は、前身となるアジア博物館時代からのコレクション形成史を論じ、数々の貴重な史料について実際の画像を紹介して報告をおこなった。

また東洋学研究所は日本の史料も所蔵しており、とくに19世紀初頭サハリンのアイヌと交易する日本人商人の帳簿類が注目される。この帳簿類は、有泉報告の「事件」の際にロシアへ持ち去られたものとも考えられ、その研究の重要性について、新潟大学の麓慎一助教授からコメントがあった。

研究集会には国内各地から70名を超える研究者が集まり、活発な議論を交わした。終了後、ポポワ所長と同じく招聘したワジム・クリモフ教授（サンクトペテルブルグ大学）は、史料編纂所が所蔵する日露関係史料を精査し、史料編纂所の研究グループと東洋学研究所の間での共同研究の推進について協議した。その結果、早ければ来年にもサハリンアイヌとの交易帳簿などの研究に取り掛かる目途がついた。これまで全く知られていなかった史料だけに、その研究成果が期待される。



保立所長に本を贈るポポワ所長

海洋研究所
防災訓練を実施

12月13日（水）13時30分から、海洋研究所中野キャンパスにおいて、平成18年度海洋研究所防災訓練が実施され、教職員、院生等約180名が参加した。

当日は、地震によるA棟2階（機器室）での出火を想定し、同階の第一発見者の「火事だー」と大声で周囲に知らせることから始まり、初期消火、避難訓練を行った。

また、垂直式救助袋により3階の教職員が避難器具取扱いの取得及び体験を行った。その後、中野消防署の指導のもとに消火器を使用した消火訓練、屋内消火栓による放水訓練、応急救護訓練（包帯法、人工呼吸法）が実施された。

最初は遠慮がちであった参加者も、時間の経過と共に積極的になり、人工呼吸法の訓練では消防署指導員の注意を受けた参加者が赤面し、周囲が思わず爆笑する場面もあり、徐々に活気が出てきた。包帯法の指導では、なるほどと思う方法に納得しながら学ぶことができ、非常に参考になった。

なお、当日、部局長との懇談のため海洋研究所に来訪されていた上杉理事が急遽飛び入り参加することにな

り、ご多忙の中、防災訓練の始まりから消火器を使用した消火訓練まで参加していただいた。



先陣を切って消火訓練に参加する上杉理事

参加者は真剣に訓練に取り組み、避難者の確認等、訓練の重要性を再確認した。最後の講評では概ねお褒めの言葉をいただいたが、反省点も多々あり、今回の体験を来年度の訓練に繋げ、方法等も抜本的に改善し、より充実した訓練を行う所存である。

大学院農学生命科学研究科・農学部
分子細胞生物学研究所
自衛消防訓練開催される

12月13日（水）13時から約2時間にわたり、生命科学総合研究棟において、大学院農学生命科学研究科・農学部と分子細胞生物学研究所の主催による自衛消防訓練が、本郷消防署と文京区役所のご協力を得て実施された。

訓練は、1階実験室において火災が発生したとの想定で、火災報知器を作動させて火災発生初期放送が自動的に流れると、北本勝ひこ生命科学総合研究棟自衛消防隊長（応用生命工学専攻生物機能工学講座微生物学研究室教授）を中心に、自衛消防隊員による初期消火活動、消防署への通報を行い、各階の研究室からの避難誘導及び避難後の人員確認を行って、會田勝美農学部自衛消防本部隊長（大学院農学生命科学研究科長・学部長）に無事全員が避難したことを報告した。

その後、本郷消防署の指導による消火器の取扱い訓練、屋内消火栓の取扱い訓練、応急救護訓練等を行ったが、屋内消火栓の実放水訓練では、予想以上に強力な水圧に体験した学生も驚いている様子であった。応急救護訓練では、3人1組となり、意識不明者の①人工呼吸、②心臓マッサージ、③AED（自動体外式除細動器、農学部に2台設置）の訓練を行い、協力し合うことにより迅

速で効果的な応急救護ができることを学んだ。文京区役所の指導による「起震車」「煙体験ハウス」での地震、火災体験では、同棟以外の学生等も参加し真剣な表情で訓練に参加した。

最後に本郷消防署より日頃の防災・防火に対する心構えなどの講評を頂き、約200人が参加した訓練は無事終了した。



応急救護方法を学ぶ学生達と會田勝美隊長（右から3人目）



学生による水消火器取扱い訓練

医学部附属病院



先端医療開発研究クラスター（第3回）、第2回疾患生命工学センター、第2回22世紀医療センター、第4回医工連携研究会合同シンポジウムを開催

医学部附属病院では、12月21日（木）10時から中央診療棟2、7階大会議室において「先端医療開発研究クラスターシンポジウム（第3回）、第2回疾患生命工学センター、第2回22世紀医療センター、第4回医工連携研究会合同シンポジウム」が開催された。

永井良三病院長から本シンポジウムの開催にあたり挨拶が述べられた後、39ユニットの研究拠点から講演と展示を中心とした様々な研究成果の発表が行われた。会場には172名の参加者があり盛会裏の中に研究成果の発表と活発な意見交換が行われた。

また終了後、ポスター展示と情報交換会が行われた。

【プログラム】

1. 開会の挨拶

東京大学医学部附属病院 病院長 永井 良三

2. 疾患生命工学センター

(1) 座長 細井義夫

(疾患生命工学センター 助教授)

- ① Macrophage Longevity in Atherosclerosis
- ② 2光子顕微鏡によるシナプスと分泌の研究
- ③ 三次元担体と胎児細胞を用いた肝組織再構築

(2) 座長 根本信乃 (分子病態医科学 助教授)

- ① ナノバイオテクノロジーが拓く未来医療
- ② COX-2阻害剤とダイオキシン腎毒性の抑制
- ③ がん治療の有効性を規定するDNA損傷修復

3. 21世紀COE

(1) 座長 植木浩二郎 (21世紀COE 助教授)

- ① 環境・遺伝素因相互作用に起因する疾患研究
- ② 脳神経学の融合的研究

4. 22世紀医療センター

(1) 座長 山内敏正

(統合的分子代謝疾患科学講座 助教授)

- ① 脂肪組織を標的とした生活習慣病治療法開発
- ② がんに対する免疫細胞治療の開発とTR

(2) 座長 垣見和宏 (免疫細胞治療学講座 助教授)

- ① DPCデータを用いた急性期病院の機能分析
- ② 放射線関連講座における臨床画像解析

5. 医工連携部・ティッシュ・エンジニアリング部

(1) 座長 佐久間一郎 (大学院工学系研究科 教授)

- ① 骨・軟骨疾患に対する新しい診断・治療装置の開発
- ② Virtual Heart Project

(2) 座長 鄭 雄一

(疾患生命工学センター 助教授)

- ①分子イメージングのための顕微鏡画像安定化
- ②インテリジェント型骨インプラントの開発
- ③WOWエマルジョンの中性子捕捉療法への応用

6. 閉会の挨拶

東京大学医学部附属病院 副院長 門脇 孝

7. 情報交換会、ポスター展示



永井病院院長挨拶



シンポジウム会場の様子



各ユニットの研究成果を紹介したポスター展示の様子

身近なサステナ～助手部屋から

平松 あい
サステナビリティ学
連携研究機構 特任助手

第8回は、若手研究者として走り出した特任助手4人が、「さすてなTimes」を送ることになりました。特任助手は、IR3Sの東京大学における研究組織、地球持続戦略研究イニシアティブ（TIGS）に所属し、毎日同じ部屋で顔をつきあわせながら共に運營業務や研究にはげみ、語り、笑い、泣き、切磋琢磨しあう日々を送っています。

普通、同じ研究室にいる助手というと、周りにいる人たちとある程度専門が同じかそれに近い専門を持っているかと思うのですが、私たちは、地理学（原）、水環境（本多）、人類生態学（関山）、地球温暖化（平松）、と異なるバックグラウンドを持ちながら一つの部屋に集まっています。自分の研究分野をサステナビリティ学という観点で見たらどうなのか、という自分の中の新しい挑戦も大切ですが、隣にいる専門の異なる同僚の視点、考え方、研究手法を間近で見ながら学びあうという実体験も大いに意義があります。

昨年この4人でタイと、中国のフィールド調査に向かう機会があったのですが、そこでもお互いの目のつけどころに興味をわきます。人口動態、廃棄物や排水などの静脈産業、土建材などの動脈フロー、土地利用変化といった調査を包括的に

行う中で、同じ地域や対象物におけるお互いの境界条件の違いやリンクが見えてくることもあります。

また季刊誌サステナの編集者の方が作った「サステナ相性度テスト」によると、「愛が地球を救う派」「頭を使ってすっきり派」「気にせず明るくどどん派」というバラバラな結果がでるほど、性格もかなり異なる4人です。同じ現象や問題に対する選択肢や解決策もひと議論生じることもあります。このように、分野も性格も異なる若手研究者が日常的に集い、そもそもサステナビリティってなんなんだ、という率直な疑問のぶつけ合い、語り合いが日常的に生まれる場、お互いから学びあい発展させる場があることは貴重なことだと思います。

思想、価値観、文化が異なる人々があまたいる地球上でどう調和をなしていくのか、また人間と自然環境はどうバランスをとっていくのか、サステナビリティ学は大きな課題にチャレンジしていくところですが、助手部屋はそのちょっとした縮小体のようです。まずは自分達自身の中から学融合がはじまっています。

助手部屋日記: サステナ☆ライフ
http://blog.goo.ne.jp/ai_tigs/



Hara & Honda



Hiramatsu & Sekiyama

産学連携セミナー『Web2.0からベンチャーを考える』開催(12月4日)

東京大学からGoogleを生み出せるか

『Web2.0からベンチャーを考える』と題する学内教職員・学生向けの産学連携セミナーが12月4日18:00-20:00、経済学研究科棟地下1階大教室で開催されました。本産学連携セミナーは、産学連携本部と株式会社ユニファイ・リサーチとの共同研究プロジェクトの一環として企画されたもので、産学連携本部の主催で行われ、多数の出席者を集めました(プログラム内容は下記参照)。

現在、インターネットの世界ではWeb2.0と呼ばれる技術・スタイルが台頭し、社会・文化・日常変革の原動力となりつつあります。検索エンジン、ブログ、SNS、ロングテール、CGM、Wiki、RSSといった技術を通して、広範なエリアで、大規模な知の組み替えが起こっているのです。この潮流に、大学もまた無縁ではいられません。スタンフォード大学におけるコンピュータ・サイエンスの研究成果が、Googleという巨人を生み出したように、IT分野において大学が果たすべき役割には大きなものがあります。本セミナーでは、Web2.0がもたらす技術革新と社会変革のあり様を俯瞰し、同時にWeb2.0の最新技術、ITベンチャー経営、エンジニアのキャリア・パス等、多角的な側面から、東京大学に期待される役割についてディスカッションしました。

【プログラム内容】

- 18:00-18:10 ごあいさつ
 産学連携本部長 教授 藤田隆史
- 18:10-18:50 基調講演:「Web 2.0とは何か」
 フィードパス株式会社 取締役COO
 小川浩氏 (『Web2.0BOOK』著者)
- 18:50-20:00 パネルディスカッション:
 「日本の大学はGoogleを生み出せるか」

(パネリスト)

ドリコム株式会社代表取締役社長 内藤裕紀氏
 データセクション株式会社代表取締役 橋本大也氏
 株式会社シリウステクノロジー代表取締役 宮沢弦氏
 フィードパス株式会社取締役COO 小川浩氏
 産学連携本部事業化推進部長 各務茂夫教授
 (コーディネーター)

株式会社ユニファイ・リサーチ代表取締役
 五内川拓弘氏 (産学連携本部共同研究員)

(総合司会)

産学連携本部事業化推進部 白石敬仁特任助教授



基調講演に聞き入るセミナー出席者

ITベンチャーから見た大学への期待とは

前半の基調講演では「Web2.0BOOK」の著者である小川浩氏から、「Web2.0」とは何か、本質的に社会にどのような変革をもたらしているのか等について大変分かり易い印象的なプレゼンテーション方法によって解説がなされました。



基調講演の小川浩氏 (フィードパス取締役COO)

後半のパネルディスカッションでは基調講演の小川氏に加え、計5名のパネリストが参画し、コーディネーターの五内川氏の進行のもと、様々な視点からディスカッションが行われました。ITベンチャーと大学との関係性を考える上で多くの示唆が得られました。



ディスカッションするパネリストの皆さん: 左から
 コーディネーターの五内川氏 (ユニファイ・リサーチ社長)、
 小川氏、内藤氏 (ドリコム社長)、橋本氏 (データセクション社長)、
 宮澤氏 (シリウステクノロジー社長)、
 各務教授 (産学連携本部事業化推進部長)

お知らせ

◇大学発ベンチャー支援施設「東京大学アントレプレナープラザ」では、6月オープンに向けて支援企業の募集を行っています。お問い合わせ等は下記までご連絡ください。

(連絡先) 産学連携本部事業化推進部
 特任助教授 白石敬仁 (03-5841-2358、内線22358)
 産学連携課 総務チーム (03-5841-1489、内線21489)
eplaza@ducr.u-tokyo.ac.jp

連絡先: 産学連携本部 (研究協力部 産学連携課)
 電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)
 ホームページ: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>
 ※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

二重の「当事者」

先端科学技術研究センター
バリアフリー分野 リサーチフェロー 星加良司さん

私は全盲の視覚障害者であり、1994年以来、学生・大学院生・研究員と立場を変えながら、本学に在籍してきた。だから、まず私は、本学のバリアフリー化の受益者である。現在は、勤務上必要な障害支援として、文献・資料の点訳や音読、文書の校正や書類への記入、出張・外出時の移動支援等を行う専門スタッフを派遣してもらっている。これによって私の情報環境に関わる不利益は大幅に軽減された。また、支援の制度的保障によって、ニーズを自己抑制することなく必要な支援を得られるようになったことも、主体的な研究活動にとって意義深い。

加えて、バリアフリーは私の研究対象でもある。バリアフリー研究というと工学系の研究領域というイメージが強いが、私がやっているのは社会学をベースにした理論研究だ。社会学は、バリアを生み出す価値や慣習や関係性を分析し、バリアフリーを阻害する制度や規範を批判的に検討するという形でバリアフリーに関わる。バリアを個人の心身機能と物理的環境との間のインタフェースの問題としてのみ捉える理解は、一面的で時代遅れのものと思なされるようになってきており、バリアフリー研究もこうした時代

の要請に合わせて変わっていかなければならない。その意味で、本学で始まった学際的なバリアフリー研究の試みには先駆的な意義がある。

このように、私はバリアフリー支援を受けながらバリアフリー研究をしているから、2つの意味でバリアフリーの当事者だということになる。このことは非常に示唆的だ。世の中にバリアが存在しているからバリアフリー研究が求められるのだが、その研究をすること自体にバリアが存在していたのでは、いつまでたってもバリアフリー研究は進まない。本学のバリアフリーの取り組みには、このディレンマを乗り越える契機がある。その意義を踏まえて、多様な構成員に配慮したいっそうのバリアフリー化を期待しつつ、そのための努力を続けていきたい。



最近、目からウロコ落ちていますか？

バリアフリー支援室(駒場支所)事務補佐員 北中裕子さん

バリアフリー支援室駒場支所で勤務を始めて、半年が過ぎた。専門知識もなく、バリアフリーという言葉の意味すら間違った解釈をしていた私が飛び込ませていただいた現場を振り返ってみようと思う。

駒場支所には、視覚障害を持つ職員がおり、私は事務をしながら、視覚障害を持つ職員をサポート(学内では支援する、と言う)を行う事も、業務の一つとなった。今まで、視覚障害者と仕事をした経験もなければ、日常を過ごした事もない私は、これはどうしようかと考えた記憶がある。触れてはいけない事とか、発してはいけない言葉とかあるんじゃないだろうか。見えるが当たり前になっている今、「あれ」「それ」「これ」で会話をしていた自分を変えられるか。そして、どこまでサポートをしたら良いのだろうか。この業界のタブーって…などなど考えている内に、勤務は始まった。

視覚障害を持つ職員と仕事をし、過ごしていく上で、いつからか自分の目からぼろぼろ音をたてて、ウロコが落ちていくのがわかった。「目からウロコが落ちる」素敵なことわざだと思う。

まず、視覚障害を持つ職員は仕事をフツーにパソコン操作しこなしている。これが本当のブラインド・タッチ、な感じで。視覚障害者は点字を使うんじゃないの?なんて考えは古いらしい。パソコン操作で、唯一違う点は、操作するにあたり「耳で聞く」くらいか。専用ソフトが、画面情報を音声化(読み上げてくれる)するのだ。なるほど、目で見る事が出来ないのだから耳を使う。当たり前の事だけ一人で納得。そして、視覚障害を持つ職員は同じ要領で、

本も読む(聞く)。視覚障害者用の図書館があり、そこから借りる。本も同じく音声化されていて、種類も豊富なようだ。

それから、日常会話で、昨日見たテレビ番組の話もする。「〇〇見た?おもしろかったよねえ〜」みたいなやりとりがある。半年前の私だったら、視覚障害者とこんな会話が出来るとは想像できなかったし、「見た」という言葉を使う事すら恐ろしかったはず…。

他にも、数多く目からウロコ話はあるが、続きはまたの機会にしようと思う。最後に、この半年は、私の中の障害者イメージが大きく変わった、意識が変わった期間だった。この様な、貴重な経験をさせていただき、支援室及び関係者の方々には感謝している。だからこそ、この経験を一人でも多くの皆さんへ伝えたい。

「缶ビールの飲み口にある点々を何だろう?と思ったあなた。それも、バリアフリーへのひとつのきっかけかも…」



< 東京大学バリアフリー支援室 連絡先 > E-mail: spds-staff@mm.itc.u-tokyo.ac.jp

本郷支所(理学部旧1号館135号室): TEL 03-5841-1715 FAX 03-5841-1717

駒場支所(先端科学技術研究センター3号館503号室): TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068

バレーボール部女子

こんにちは、運動会バレーボール部女子です。
 私たちは、年2回行われる関東大学リーグ戦で勝つことを目標に、主に週3回、1日3時間の練習を重ねています。バレーボール部女子の抱える問題、それは部員が少ないことです。また、アタッカーを含めた部員の平均身長が約160cmと、ほかのチームに比べて全体的にプレイヤーの身長が低いことも挙げられます。



部員が少ないながらも、監督やコーチ、OB・OGに指導を受けながら、活気のある練習をしています。
 練習はメニューを工夫し、密度の高い練習を目指しています。さらに、身長差によるハンディキャップを克服するために、レシーブ力の向上や緩急をつけた攻撃など、本学女子部ならではのバレーボールを実現しようと努力しています。

2006年の春季リーグ戦では、入れ替え戦で負けてしまい9部から10部に降格してしまいました。秋季リーグ戦では力及ばず10部に残留という結果でした。いま私たちは、悔しさをばねに次の春季リーグ戦で必ずや9部に返り咲くことを目標に、体力作りや基礎的な練習まで立ち返り、プレイヤーひとりひとりのレベルアップを図っているところです。

皆さまどうぞ、ご声援、ご支援、よろしくお願ひ致します。

(バレーボール部女子
 苅郷 友美)



★★DATA★★

部員数：7名
 練習場所：駒場キャンパス第一体育館
 練習日：火・木・土・日
 年間予定：4月 春季関東大学リーグ戦（～5月）
 5月 国公立大会
 7月 京都大学定期戦
 8月 七大戦、夏合宿
 9月 秋季関東大学リーグ戦（～10月）
 3月 春合宿
 活動実績：春季関東リーグ 3勝4敗（9部降格）
 秋季関東リーグ 5勝2敗（10部残留）
 部長：宇垣 正志（大学院新領域創成科学研究科教授）
 監督：菅康 博（男子バレーボール部4年）
 HP：http://today-volley.web.infoseek.co.jp/girls/home.htm

バスケットボール部女子

私達運動会バスケットボール部女子は、人数不足のため活動休止を余儀なくされていた時期がありました。一昨年に、やる気のある新入生達で活動を再開させ今に至ります。

入学してみたら入部したかった女子バスケ部が存在していないことに唖然とし、ただただ部の再建の事務処理に追われるくりに試合に出場することもままならなかった1年目、かろうじて人数が揃いなんとか試合をこなせるようになった2年目、そして今年度は多くの新入生を迎え、軌道に乗って充実した活動を行うことができた3年目となりました。自分達でも、まるでマンガの世界のようにドラマチックな活動の歴史だ、と思わず苦笑してしまいます。



バスケットをしてもなかなか場所も時間も確保できないという苦しみを味わっている世代が現役なので、プレイできることに対する貪欲さ、あくなき向上心は他のどの部にも負けないと自負しています。

平成19年度は、多くの新入生を期待するとともに、関東リーグ3部昇格を目標に練習に励んでいきたいと考えております。部活動を再建させたメンバーが4年生となり最後の1年を有終の美で締めくくりたいと強く思い、下級生達が先輩の志を受け継ぎ二度と途切れることのないよう女子バスケ部をしっかりと支えています。

土台の出来上がった女子バスケ部に、やる気のある新入生が多く集まってくれることを願っております。

(バスケットボール部女子
 浅田 陽子)



★★DATA★★

創立：平成16年に活動再開
 部員数：14人
 練習場所：駒場キャンパス第2体育館
 練習日：火・木・土
 年間予定：4月 国公立大会
 5月 春季リーグ戦
 6月 京大戦
 7月 七大戦
 9月 秋季リーグ戦
 11月 東京六大学戦、OG会
 活動実績：国公立大会3位タイ、六大学戦6位
 秋季リーグ戦4部Eリーグ4位、京大戦優勝
 部長：川原 信隆（大学院医学系研究科教授）
 HP：http://www.geocities.jp/u_tokyo_wbbc/index.html

編集：学生部学生課体育チーム (内)22510



こんにちは、情報課パソコンヘルプデスクです。
今回から5回にわたって連載させていただくことになりました。
次回からはワード、エクセルのちょっと使える小技をご紹介しますので楽しみに！

パソコン講習会(職員向け)

情報課では、初級者～中級者向けにパソコン講習会を開催しています。
毎週同じ内容をご用意しておりますので、時間のあるとき、必要になったときに、いつでもご参加いただけます。次のような方に最適です！

- ・今までなんとなく使っていたけど、一度体系的に整理したい。
- ・基本的な機能しか使ったことがないので、他にどんな使い方ができるのか知りたい。
- ・パワーポイント(アクセス)は使ったことがなかったけど、急に必要になった。

ヘルプデスク(職員向け)

パソコンヘルプデスクでは、ワード、エクセル、パワーポイントなどのアプリケーションに関する質問にお答えしています。

- ・以前使ったあの機能はどうやるんだっけ…。
- ・こんな機能があれば、すぐできるんだけどないのかなあ…。
- ・この資料をまとめないといけないんだけど、どうやったら一番簡単なあ…。

業務の中で、こんな風に感じることはありませんか？パソコンヘルプデスクがお手伝いいたします。質問は、電話やメールはもちろん、事前にご連絡いただき、直接お越しいただいても結構です。

パソコン講習会

場所：本部棟4階情報課
時間：火曜～金曜 13:30～16:30
内容：火曜 Word基礎・応用
水曜 Excel基礎
木曜 パワーポイント基礎・応用
金曜 アクセス基礎
URL：http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen4/pc_seminar2.html
※申込みは各部局庶務担当係を通して下さい。

情報課パソコンヘルプデスク

場所：本部棟4階情報課
受付時間：9:00～17:30(火曜～金曜 13:30～16:30はPC講習会のため不在。)
内線番号：22182
メール：help4@adm.u-tokyo.ac.jp
URL：http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen4/pc_helpdesk.html

問合せ：総務部情報課運用管理チーム (内)22179

調達本部です



第21回 半年たった「UT購買サイト」

UT購買サイトのオープンから半年が経過しましたが、その利用度合はまだまだ低いといわざるを得ません。オープン以来、さまざまな意見が寄せられ、それに従っていくつかの改善も実施しました。今回あらためていくつかの部局を廻ってご意見を聞いた中で、早急を実現すべき改善点として、次の点が浮かんでまいりました。

- ①現在表示されている「東大向け特別価格」だけでなく、「一般向け価格」を画面に表示することで格安感を実感できるようにすること
- ②予算財源の確定期限を、現在の「発注時」から「検収時」に移す(遅らせる)こと
- ③カタログ外発注の改善。具体的には発注したい商品を扱う各サプライヤに、自動的に見積もりを求めるシステムとすること
- ④発注権限のない、いわば「消費者」である教職員がカタログを見ることができるようになること

これらの点については、早速システム会社との調整に入っており、できるだけ速やかに実現を図ります。

さて、今回いくつかの部局を廻って強く感じたことのひとつに、UT購買サイトが「文具」専用と誤解されているのではという点があります。実際には、日用雑貨から照明器具、蛍光灯、家具類そしてパソコン等々10万円近くの商品がカタログ化されています。さらに、今回サプライヤの2次募集を実施しましたので、カタログはますます充実します。一般的な物は「ほとんどある」といいたいのですが、万が一にせよ「長い時間かけて検索したけど、結局無かった」と言われるのもつらいところです。そこで、UT購買サイト専用のヘルプデスクに

「〇〇は購買サイトで買えますか？」という質問をする「裏ワザ」もあることをこっそりお知らせしておきます。伸び悩んでいる実績ではありますが、これまでのところUT購買サイトを通じた買い物での節減率は、全学平均で約2割程度となっており、利用効果は歴然としています。予算規模を考慮すると、今のところ「本部」のみがかなり確実にUT購買サイトを利用していると考えられますが、全学的にUT購買サイトを集中的に利用することで、大きなメリットを実現したいと思う次第です。

2月には「UT試薬サイト」もスタートします。発注から支払いまでの履歴が時系列で残されるweb発注の利点は、公費使用が適正に行われたことを示す際にも有効性を発揮します。従来からのやり方を変えることには、必ず「面倒くさい」という思いが伴うのが常ですが、是非、UT購買サイトに目を向けて頂きたいと思います。新しいUT試薬サイトのシステム操作説明会の機会を捉えて、UT購買サイトについての再度の説明会も実施しますのでどうぞ御参加ください。

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

ワタシのオシゴト 第6回

Rings around the UT

東京大学薬学系教務チーム大学院担当

高橋 麻美子 さん



赤門

(旧加賀屋敷御守殿門)

1827 (文政10) 年の建立から、
今年でちょうど180年!

11代将軍徳川家斉の娘 溶姫と13代加賀藩主前田斉泰の婚礼の日<11月27日>が竣工日とされています。

赤門は、老若男女を問わず注目される名所のひとつです。本郷キャンパスにおいては‘見たいランキング’の第1位に数えられるでしょう。

小学生からの「なぜ赤いの?」をはじめ、質問が多いことも、皆さんの関心の高さを示しているのだと思います。ここであらためて、赤門の形式について記しておきます。

『国宝・重要文化財建造物目録』(文化庁:1990年発行)に、【三間薬医門、切妻造、本瓦葺、左右繋塀及び離番所付、附左右袖塀2棟】とあります。

ちなみに、三間(サンゲン)とは正面の柱間が3つという意、切妻(キリヅマ)とは書物を半ば開いて伏せたような形を言います。(『古建築の細部意匠』近藤豊著:大河出版発行)

さて、実は私も赤門の好きなひとりですが、多くの方が朱塗りの門扉に惹かれる中で、特に屋根瓦などにある紋様に興味を持ちました。現在刻まれている紋様は5種類です。大棟の「三つ葉葵」、鬼瓦の「學」、軒の「梅鉢」「巴」と「學」(鬼瓦と軒の「學」は書体が異なっています)。そしてその数は、外側(正面)と内側(構内)を合わせて、およそ1000枚也(1、2、3...と数えていたら、学生のHさんに見られ、地道な作業だと励まされたあ)。それぞれの枚数については、ここでは省略します。

また、その飾られた紋様にも移り変わりのあることが、医学部の卒業アルバムから分かりました。

国の重要文化財でありながら、大学の通用門として現在も役目を果たす赤門。足早に通り過ぎることの多い学内の皆さん、時にはちょっと立ち止まって、屋根瓦や塀も眺めてみませんか?おもしろい発見があるかもしれませんよ。(あっ、今の時期は寒いですかね。)

~次回へ続くかもしれない!?~

さらに..赤門についてご興味のある方は、『東京大学史史料室ニュース』(第36号2006年3月31日)及び『北陸中日新聞』(2006年9月10日)をご参照になってみてはいかがでしょうか?



コソダテとオシゴト

東大で勤務をして今年で6年目。現在は夫、娘との3人暮らしです。東大では平成18年7月から薬学系研究科で教務(大学院)の仕事を担当しています。主に大学院生の学籍、成績、論文等の業務を行っています。まだまだ慣れない仕事ばかりですが、先生方や職員の方々にご指導頂きながら、学生の皆さんが充実した生活を送れるよう、学生の立場に立ったよりよいサービスを充実させていきたいと思っています。特に薬学系の将来の研究者、医療行政等に貢献する人材育成の一助となることのできるよう、事務として日々の業務を一生懸命頑張っていきたいと思っています。

ここ数年、大学が法人化となり、家事、育児をしなが仕事をするようになったりと、私の仕事や生活環境が変化しました。そのような中で、私は夫婦で育児休業を取得しました。男女共同参画社会の一員として、また一人の女性として社会貢献していきたいと思っています。そして、これから仕事と家庭を両立していく方々のよきアドバイスができればと思います。

毎日の生活がとても慌ただしく、しかしながらとても充実している今日です。自分の仕事と家庭生活がいろいろな方々に支えられ、社会人として今の仕事ができることにとても感謝しています。

これがわたしのオシゴトです。



お子さんと
2ショットで



血液型: 0型
自分の性格: 絶やさず
明るい雰囲気を作ります!
出身地: 秋田県

次回執筆者のご指名: 寺床純三さん

関係: 農学部在職中に一緒に、
農学部の「ガーデニング」ミドレンジャーズ仲間
一言紹介: いい人です。弟だったらいいですね。

INFORMATION

■農学部からの贈り物！！

農学部の演習林からUTCCに昨年も素敵な贈り物が届きました。皆さんご覧いただけましたでしょうか？

年末には、本物のもみの木『クリスマスツリー』を店内に飾りました。年始には入り口に『門松』を飾っていました。お客様からは「季節感があって素敵ですね」や「東大に演習林があるんですね」など、ご好評いただきました。UTCCでは、こういった学内にしか出来ない取り組みを少しでも発信し続けられればと思っております。

農学部の皆さま、本当にありがとうございました。



■UTCCスタッフ紹介

～Part 1～

UTCCでは東大の学生が活躍しています。今後も少しずつ紹介できればと思っておりますのでよろしくお願ひします。励みになりますので店頭で見かけた際はお声がけ下さい。



農学部木質材料学研究室4年後藤 豊



●もみがらボード
販売価格：630円（税込）

UTCCには2年生の秋から参加させていただいております。販売関係のお仕事はもちろんですが、商品の開発にも関わらせていただいております。

例えば、今私の所属している研究室から、環境調和型の新素材のもみがらボードなどはお蔭様で商品化が実現しました。

普段なかなか得られない経験をさせて頂き日々とても充実しています。今後ともUTCCの新たな動きにぜひご注目下さい。

（担当：コミュニケーションセンター 辻）



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

サステナビリティ学連携研究機構

公開シンポジウム開催のお知らせ

地球環境と人間生存に危機をもたらすサステナビリティの諸問題は、昨今ますます深刻化しており、これらの問題解決に向けたビジョンと方策を示す「サステナビリティ学」の重要性に対する認識が高まっています。

サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）では、サステナビリティ分野の専門家の議論を踏まえつつ、世界の21世紀課題への明確なビジョンを持つために、官界、産業界の各々リーダー的存在である著名な講演者をお招きし、ご講演をいただきます。

また、パネル討論では、資源と環境の関係を、代替エネルギーの推進と温室効果ガスの削減、といったように、コインの表裏として捉え、双方の持続可能性を同時に追求していくことについて議論します。また、これらの問題を包括的に捉えるために、必要な科学的アプローチに加え、対策を進める上での政策や枠組み、価値・倫理観の創出、社会のコンセンサスをどう築いていくか、などについても、様々な立場から討論します。そして、資源と環境の持続両立が可能となるような、新たな社会像となる「サステナブルな社会」へのビジョン提示について、各パネリストと検討していきたいと考えております。

本年も次のとおり公開シンポジウムを開催いたします。みなさまのご参加をお待ちしております。

東京大学創立130周年記念事業

共催 日本経済新聞社、国際研究型大学連合 (IARU)

テーマ 資源と環境が支える地球と人類の未来

日時 2月3日(土) 13:00~17:00

場所 安田講堂

《プログラム》

趣旨説明

13:00-13:15 小宮山 宏 東京大学総長・IR3S機構長
「サステナビリティ学の世界的研究拠点形成を目指して」

基調講演

13:15-13:45 奥田 碩
トヨタ自動車株式会社取締役相談役
「産業界における資源・エネルギー問題とサステナビリティ」

13:45-14:15 川口 順子
参議院議員・元外務大臣・元環境大臣
「もっと環境先進国へ
—あなたの選択が温暖化を防ぐ」(仮題)

14:15-14:45 Garry Brewer (ゲリー・ブルーワー)
イエール大学教授
「未来を創る：持続性へのシナリオ構築」

休憩

14:45-15:00

総合討論

15:00-16:55
「資源・エネルギーから考える持続可能な未来社会」
パネリスト
・松尾 友矩 東洋大学学長
・Peter Wilderer (ピーター・ウィルダラー)
ミュンヘン工科大学教授
・Leena Srivastava (リーナ・スリバスタバ)
エネルギー資源研究所 (TERI)
エグゼクティブディレクター
・Garry Brewer (ゲリー・ブルーワー)
イエール大学教授

モデレータ

武内 和彦 東京大学教授・IR3S副機構長

閉会挨拶

16:55-17:00 住 明正
東京大学教授・TIGS統括ディレクター

参加申込み(入場無料:定員に達し次第締め切ります。)
<http://ir3s.u-tokyo.ac.jp/>



昨年のIR3S公開シンポジウム 総合討論

シンポジウム・講演会

大学院理学系研究科・理学部

第54回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第54回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、名古屋大学大学院理学研究科の東山哲也博士による、植物の受精の仕組みに関する講演です。最先端の植物科学研究に気軽に触れられる、絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：東山哲也(名古屋大学大学院理学研究科教授)

演題：「花の中での雌雄の出会い」

日時：2月24日(土) 13時~15時

場所：理学系研究科附属植物園本園(小石川植物園)
柴田記念館

参加費：セミナーは無料ですが、一般の方は入園料(大人330円)が必要です。

参加申込方法：

2月20日までに往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：

〒112-0001 文京区白山3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会
koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園
杉山宗隆助教授(03-3814-0368)

募集

募集

学生部

本年度第2回「東京大学総長賞」の募集 について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を収めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成14年度から設けられています。

この表彰は、本学教職員・学生からの推薦に基づき、「東京大学学生表彰選考委員会」（以下「選考委員会」という。）が選考にあたり総長が表彰するものです。

選考委員会では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものが決定されます。

なお、本年度から年2回行われる授与のうち、**第2回（春）は学業のみを対象に募集し、推薦者は各学部長及び各研究科長・教育部の長のみ**となります。また、第2回（春）には年間の授与者の中から特に優秀な者に対し、総長大賞が授与される予定です。

記

1. 提出物：別紙様式1（個人）又は別紙様式2（団体）に必要な事項を記入し、参考資料等を添付してください。また、書類の提出にあたってはホームページ上の「推薦書類の提出について」を参照してください。
2. 推薦基準：以下のとおりです。
3. 提出期限：**平成19年3月9日（金）正午まで（必着）**
4. 選考結果：3月中旬に推薦者及び受賞者へご連絡するとともにホームページに掲載します。
5. 授与式：平成19年3月22日（木）午後5時より小柴ホール（理学部1号館）にて実施を予定しています。日程の詳細は決まり次第お知らせします。

◎詳細については、ホームページをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/h12_j.html

【本件に関するお問い合わせ】

担当：学生部学生課学生生活チーム（大八木・宮内）

内線：22529／22514

E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



東京大学総長賞記念品

平成18年6月28日
学生表彰選考委員会

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」推薦基準

東京大学学生表彰実施要綱（平成14年3月19日総長裁定、平成18年6月28日改正）第3に基づき、推薦の基準を以下のとおりとする。

- (1) 学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人若しくは団体又は学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- (2) 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人若しくは団体又は課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人若しくは団体
- (3) 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人若しくは団体又は社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- (4) 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人又は団体
- (5) その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人又は団体

上記基準による推薦者については、自薦又は他薦とする。

ただし、基準（1）の推薦者は、学部学生については学部長、大学院学生については研究科長・教育部の部長に限る。

なお、年2回の授与のうち、第1回目（秋）の推薦は上記基準の（2）～（5）を、第2回目（春）の推薦は基準の（1）をそれぞれ対象とする。

また、在学中の学業、課外活動、社会活動等の評価、活動実績等が上記基準に該当する者は、卒業又は修了後1年以内に限り選考の対象とする。



お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、1月から3月の間に発行される各号において、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院法学政治学研究科・法学部

伊藤 眞 教授

（民事訴訟法）

日時：1月31日（水）15:00～

会場：法文1号館25番教室

演題：「民事紛争の解決と民事訴訟法理論の役割」

江頭 憲治郎 教授

（商法）

日時：1月25日（木）16:50～

会場：法文2号館31番教室

演題：「新社会法下の組織再編行為」

大学院工学系研究科・工学部

鎌田 元康 教授

（建築学専攻 建築環境学講座）

日時：2月28日（水）15:00～17:00

会場：工学部1号館15号教室

演題：「空気・水環境と建築設備」

大学院理学系研究科・理学部

和達 三樹 教授

（物理学専攻）

日時：2月9日（金）16:30～18:00

会場：理学部1号館 小柴ホール

演題：「私の物性基礎論・統計力学

—研究者として、教育者として—」

国際・産学共同研究センター

安田 浩 教授

（前国際・産学共同研究センター長）

日時：2月20日（火）15:30～17:20（受付開始15:00）

会場：工学部新2号館大講堂（213講義室）

演題：「画像によるイノベーションを目指す半世紀」

連絡先：last.lec@mpeg.rcast.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

保健センター

本郷支所改修工事関連及び休診のお知らせ

現在、保健センター本郷支所では1階部分の改修工事を進めています。工程により若干の騒音や振動及び塗装用塗料の臭気等が生ずる日があります。また健康管理室及び事務室等を移設し、業務を行っているため、利用される学生・教職員の皆様にはご迷惑・ご不便をおかけしますが、ご理解のほどよろしく申し上げます。

2月2日（金）は、移設中の健康管理室等の業務復旧作業等を行いますので、全診療科を休診（救急処置は除く）とします。

※改修工事に伴い本郷支所での診療や業務に変更が生じる場合、保健センターホームページに掲載、または本郷支所入口等に掲示しますのでご確認ください。

参照：

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/health/hhomeflame.htm>

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第499（1月10日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第499（1月10日）号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

佐藤直樹：駒場祭を見つめなおす

森山 工：東アジア四大学フォーラム・ハノイ会議

林 少陽：「総合」への意志

佐藤安信：「人間の安全保障」国際シンポジウム

「検証カンボジア！パリ和平協定から15年：貧富の格差の縮小と民主的社会的実現に向けて」を終えて

〈駒場をあとに・おくる言葉〉

浅島 誠：駒場キャンパスの思い出——温故知新——

松田良一：勤勉なスーパーマン、浅島誠先生を送る

宮本久雄：首こうべを回らせば

山本 巍：アデュー、ア デュー 宮本久雄先生

太田浩一：「あとがき」はなくてもいいのだけれど

松井哲男：太田先生、ボン・ヴォアージュ！

竹内信夫：胡不帰

小林康夫：竹内信夫さんをおくる

谷内 達：駒場の二十年

荒井良雄：谷内先生を送る

松本幸夫：キャンパスの片隅で

坪井 俊：松本先生、ありがとうございます

植田直志：駒場をあとに

兵頭俊夫：植田直志先生を送る

〈時に沿って〉

川島 真：無底の釣瓶を以て井水を汲むが如く

お知らせ

情報基盤センター

公開鍵認証基盤（PKI）認証局の試験運用 （UT-CAトライアル）のお知らせ

情報基盤センターPKIプロジェクトでは、東京大学に公開鍵認証基盤（PKI）を普及させるための研究・開発を行なっています。わかりやすく言えば、現在使っている職員証／学生証の中に本人確認のためのデータを入れ、それをパソコンに接続することで、安全・確実な本人確認の手段とし、その人だけのサービスを提供できるようにすることを目標としています。またこれを利用すればメールの暗号化や電子署名も可能です。

7月に認証局のプロトタイプの完成および学内外へのお披露目を経て、現在実証実験として、協力いただける数部局において実際にICカードを配付し利用していただいています。11月に情報学環、12月には情報基盤センターにて登録局支部の設置を行ないました。

ご興味のある方は、詳しくは情報基盤センターアプリケーション支援係（内線：22739）までお問い合わせください。

ここでUT-CAトライアルの利用時に必要になるフィンガープリントをお知らせします。UT-CAトライアルの認証局証明書のフィンガープリント（拇印）は下記の通りとなっておりますので、ご利用になる方はご確認ください。

Root Certification Authority（rootCA.cer）

アルゴリズム：SHA-1

B442DCE7 DEFA463D 1D6A6A23 02A29959
018B4214

Internal Certification Authority（subCA.cer）

アルゴリズム：SHA-1

0FAFDC77 007992C1 2C0DB23C 205E4AD3
7D6232AA

※お使いのソフトウェアにより区切り記号の種類、位置は異なります。英数字の部分のみを確認してください。また大文字小文字の区別はありません。

その他の情報はPKIプロジェクトウェブページ
<http://www.pki.itc.u-tokyo.ac.jp/> をご覧ください。



登録局支部の設置風景（情報基盤センターにて）

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。)

●スケジュール：

1/26 (金) 13:30-14:30 日本の論文を探すには？
1/31 (水) 15:00-16:00 自宅から検索するには？
2/14 (水) 11:00-12:00 Web of Science (日本語)
2/20 (火) 15:00-16:00 Web of Science (English)

●コース概要：

＜テーマ別ガイダンス＞

1つのテーマに沿って、検索実習を交えながら解説します。

■日本の論文を探すには？ (60分)

FELIX、CiNiiの使い方を中心に、日本の論文・雑誌記事を検索できるデータベースを紹介します。

(※このコースは従来の「データベースユーザトレーニング・FELIXとCiNiiコース」を発展・改編したものです。)

■自宅から検索するには？ (60分)

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルなどを紹介します。また、通常は学内からのみ利用可能なデータベース・電子ジャーナルでも、手続きをして学外から利用できるものがありますので、その方法を紹介いたします。

さらに、帰省先や海外で図書館を利用したい人向けに、他大学等の図書館を利用する際の手続き・注意点を説明します。春休み前におすすめのコースです。

＜データベースユーザトレーニング＞

特定のデータベースの使い方について、検索実習を交えながら解説します。

■Web of Science (60分)

全分野の主要な学術雑誌(約8,800誌)に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワードによる検索に加え、引用文献をキーにした検索も可能です。

(2/8 (木)に事前申込制の“Web of Science新機能説明会”も開催します。どうぞご参加ください。)

＜Database User Training (English Session)＞

■Web of Science Course (60 minutes)

2/20 (Tue.) 15:00-16:00

Covers articles published in major academic journals (about 8,800 journals).

In addition to conventional searches by keyword, it provides information on citation inter-connections.

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

情報基盤センター

“Web of Science新機能説明会” 開催のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、「EndNote Web」など、Web of Scienceの新機能についての説明会を開催します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●日時：

2月8日(木) 15:00-16:30

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館3階 大会議室

※西口玄関(事務用・赤門側)からお入りください。

●講師：

矢田俊文氏(トムソンサイエンティフィック)

●申込方法：

予約が必要です。

下記のサイトからお早めにお申し込みください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

●説明内容：

以下の新機能・新サービスについて説明します。

- ・新規搭載の文献管理ソフト「EndNote Web」
- ・論文の引用分析がグラフで分かる「Citation Report」
- ・著者識別システム「Distinct Author Identification System」
- ・ECCS(情報基盤センター教育用計算機システム)のアカウント認証による学外からの利用方法

Web of Science初心者の方、全般的な検索方法の講習をご希望の方は、「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ」をご覧ください、Web of Scienceコースにご参加ください。

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649（内線：22649）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

訃報

柳田 博明 名誉教授

名誉教授柳田博明先生には病気ご療養のところ2006年11月20日ご逝去されました。享年71歳でした。



先生は1958年東京大学工学部応用化学科をご卒業になり、1963年に大学院博士課程を修了し工学博士の学位を授与されました。

その後東京大学工学部助手、講師、助教授を経て、1978年東京大学工学部教授にご就任されました。1987年に東京大学先端科学技術研究センターに配置換えられ、1989年より同センター長および東京大学評議員を併任されました。1991年には工学部教授に戻られ、同年より1995年まで東京大学環境安全センター長（改組により1993年より環境安全研究センター長）を併任され、1996年の東京大学のご退官に際し名誉教授の称号を授与されました。

先生はセラミックス材料科学の分野で先導的な研究を進め、各種構造と電気的物性の相関に基いた様々な電子セラミックス材料の開発、界面設計による分子識別、非破壊信頼性評価法の確立など多くの業績をあげられました。さらに、自己診断や自己特性制御機能を持つインテリジェント材料、知的機能に簡明さと環境調和性を備えた賢材の概念を提唱し、新しい学問分野の開拓に取り組まれました。これらの成果により、日本化学会学術賞、日本セラミックス協会100周年記念学術功労賞、米国セラミックス学会フェローおよびW.D. Kingery賞などを受賞され、1998年には紫綬褒章を受けられました。

東京大学ご退官後も精力的に活動され、1996年より財団法人ファインセラミックスセンター専務理事・試験研究所長、2000年より名古屋工業大学学長、2004年より学術振興会・学術システム研究センター副所長、2006年より名古屋市科学館長などを務められました。

先生は卓越した独創力と柔軟な思考力をもって新たな研究領域を開拓するとともに温厚な人柄により後進の育成に献身し、併せて様々な学協会や官公庁の運営と発展に貢献され、21世紀への科学技術展開のあり方を提唱してこられました。先生のご逝去は痛惜の念に絶えませんが、ここに謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院工学系研究科）

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名(五十音)順

| 発令年月日 | 氏名 | 異動内容 | 旧（現）職等 |
|----------|-------|--|-----------------------|
| （退 職） | | | |
| 18.12.31 | 桑島 邦博 | 辞職（自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター戦略的方法論研究領域教授） | 大学院理学系研究科教授 |
| 18.12.31 | 紫藤 貴文 | 辞職 | 大学院理学系研究科助教授 |
| （採 用） | | | |
| 18.12.16 | 安原 洋 | 医学部教授 | |
| 19.1.1 | 望月 学 | 大学院農学生命科学研究科助教授 | 東京農工大学大学院共生科学技術研究院助教授 |
| 19.1.1 | 大友順一郎 | 大学院新領域創成科学研究科助教授 | |
| 19.1.1 | 七丈 直弘 | 大学院情報学環助教授 | 大学院情報学環科学技術振興特任教員 |
| （昇 任） | | | |
| 18.12.16 | 石井 聡 | 大学院医学系研究科助教授 | 大学院医学系研究科講師 |
| 18.12.16 | 村上 存 | 大学院工学系研究科教授 | 大学院工学系研究科助教授 |
| 19.1.1 | 高槻 成紀 | 総合研究博物館教授 | 総合研究博物館助教授 |
| 19.1.1 | 一ノ瀬正樹 | 大学院人文社会系研究科教授 | 大学院人文社会系研究科助教授 |
| 19.1.1 | 寺杣 友秀 | 大学院数理科学研究科教授 | 大学院数理科学研究科助教授 |
| （兼 務 命） | | | |
| 19.1.1 | 鹿野田一司 | 低温センター長 | 大学院工学系研究科教授 |

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



ご意見・ご感想投稿大募集！

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。

投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてください。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

<投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm.u-tokyo.ac.jp

<記入項目>

- ①氏名・所属 ②連絡先電話番号
- ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル（20字以内） ⑤本文（300字以内）

「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください（⑤はなし）。

広報委員長 新年の挨拶

新年を迎えるにあたりまして、広報委員長よりご挨拶いたします。

「東京大学の進むべき方向を社会に示す広報の重要性」

広報委員長 高増 潔

あけましておめでとうございます。平成19年の年頭にあたり、御挨拶申し上げます。

昨年10月に広報委員長を拝命いたしました高増潔です。私は、2005年10月から総長補佐として1年間、大学全体の仕事をお手伝いしてきました。この経験を生かし、半年間という短い期間ですが前任の佐久間一郎先生の後を受けて、広報委員長として大学全体の広報の仕事を推進したいと考えています。

法人化から2年半の間、東京大学は広報の重要性を踏まえて、広報室を中心とした組織の充実を図ってきました。この成果として、広報の体制は対外的な対応や危機管理を含めて、かなりしっかりしたものになっています。

広報委員長として、安心して仕事ができる状態になっています。しかし、東京大学の存在感は東京大学の中にいて感じるものと、学外において感じるものとは大きく違っています。特に、東京大学が何を目指していて、それが日本および世界の中でどのくらい重要性があるかということが、大学の外からは分からなくなっています。そこで、学外に対して東京大学のへの広報がこれからの問題となってきます。

東京大学は、今年の4月に130周年を迎えます。「時代の先頭に立つ」ということを基本コンセプトにして、東京大学のあるべき姿と進むべき方向を社会に示す重要な機会です。今年の11月までの期間に、多くの研究シンポジウム、海外大学とのスポーツ・学生交流、展示会・展覧会、130のモニュメントによる「知のプロムナード」などの計画が、130周年記念事業として行われます。東京大学の未来像を、海外を含めた社会に理解していただく重要な機会と考え、広報活動の一層の充実を図りたいと考えています。

このような広報活動を支えていくのは、自律分散協同系としての学内の支援です。皆様の協力をお願いすると同時に、学内の広報にも力をいれたいと思っています。ご支援をお願いします。

EVENT LIST

| 行事名 | 日時 | 場所 | 連絡先・HP等 |
|---|--|--|---|
| 東文研シンポジウム『東アジアの「美」の人類学』 | 1月25日(木) 10:00~ | 工学部8号館7階東文研会議室 | 主催：東文研「21世紀アジアの研究」プログラム（超域連携プログラム「アジアの「美」の構築」）共催：東文研班研究「東アジアにおける「民俗学」の方法的課題」 E-mail:suga@ioc.u-tokyo.ac.jp |
| FSフォーラム 柏ハイパーソニックフォーラム～飛行の新領域へ～ | 1月25日(木)フォーラム10:00～、風洞公開16:00～18:00 1月26日(金)10:30～16:30 | 柏キャンパス (柏図書館内メディアホール等) | 柏風洞WG URL: http://daedalus.k.u-tokyo.ac.jp/wt/wt_index.htm |
| CSISセミナー | 1月27日(土) 10:00～12:00 | 工学部14号館8階802号室 (都市工学専攻会議室) | URL: http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/japanese/news/csisseminar2006.html E-mail:asami@csis.u-tokyo.ac.jp |
| 法学部学術創成プロジェクト研究成果公開シンポジウム | 1月27日(土)、 28日(日) | 六本木アカデミーヒルズ49 オーデトリウム | 学術創成「ボーダレス化時代における法システムの再構築」プロジェクト事務局 吉田 E-mail:legalsys@j.u-tokyo.ac.jp http://www.j.u-tokyo.ac.jp/legalsys/index.htm |
| セミナー 日経ビジネスクリエーション塾～ 「ITものづくり：デジタル設計開発の課題と展望」 | 1月30日(火) 10:00～17:00 | 安田講堂 | 日経ビジネスクリエーション塾事務局 TEL:03-5452-2505 |
| 社会科学研究所創立60周年・ 東京大学創立130周年記念講演会 「社会科学研究所と日本の社会科学」 | 2月1日(木) 15:30～17:30 | 農学部・弥生講堂 一条ホール | E-mail:aniv60@iss.u-tokyo.ac.jp |
| サステナビリティ学連携研究機構公開シンポジウム | 2月3日(土) 13:00～17:00 | 安田講堂 | https://www.entryform.jp/sustain/r/entry.php |
| 超新星1987A 20周年記念講演会 —ニュートリノ天文学の誕生とこれから— | 2月17日(土) 14:00～16:30 (13:30開場) | 安田講堂 | URL: http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/sn20yrs/ |
| シンポジウム「強磁場MRI—生命の可視化—」 | 2月20日(火) 9:15～17:15 | 医学部教育研究棟14階鉄門講堂 | 大学院新領域創成科学研究科物質系専攻和田研究室 E-mail:m-hatano@ams.k.u-tokyo.ac.jp |
| 第54回小石川植物園市民セミナー | 2月24日(土) 13:00～15:00 | 小石川植物園 柴田記念館 | E-mail:koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp TEL:03-3814-0368 |
| 行事名 | 開催期間 | 場所 | 連絡先・HP等 |
| 特別展示『東京大学コレクション—写真家上田義彦のマニエリスム博物誌』展 | 11月3日(金・祝) ～平成19年1月28日(日) (休館日もありますので確認下さい) | 総合研究博物館 | ハローダイヤル: 03-5777-8600 URL: http://www.um.u-tokyo.ac.jp |
| 東京大学法学部連続講演会「高齢化社会と法」 第8回「高齢社会の中の少子化対策」 講師：増田雅暢（内閣府参事官） | 平成19年1月27日 (土) 13:30～ | 法学政治学系総合教育棟 (通称：法科大学院ガラス棟) 101教室 | 大学院法学政治学研究科附属ビジネスロー・比較法政研究センター E-mail: icclpbic@j.u-tokyo.ac.jp FAX: 03-5805-7143 URL: http://www.j.u-tokyo.ac.jp/%7ebic/ |

Contents

特集

- 02 130周年記念事業のつくりかた
—みんなで祝う130周年—

NEWS

一般ニュース

- 05 人事部
今年度の定年退職教員は58名
- 06 研究協力部
APRU遠隔教育とインターネット2006国際
会議APRU Distance Learning and the
Internet (DLI) 2006 Conference
- 06 研究協力部
統括プロジェクト機構「知の構造化ワー
クショップ」を開催
- 07 施設部
柏国際学術都市支援会が発足
- 08 総務部
2006年度業務改善「総長賞」表彰式
- 09 研究協力部
独立行政法人物質・材料研究機構と連携協
力の推進に係る協定書調印式が行われる

部局ニュース

- 09 生産技術研究所
生産技術研究所千葉実験所公開開催される
- 10 社会科学研究所
国際ワークショップ「世界における社会科
学的日本研究の現状と展望」を開催
- 11 21世紀COEプログラム機械システム・イノベーション
国際シンポジウムシリーズ開催される
- 12 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属農場で「東大農場収穫祭 with 西東京ア
ースデイ2006」開催
- 13 大学院農学生命科学研究科・農学部
外国人留学生見学旅行を実施
- 14 大学院人文社会系研究科・文学部
21世紀COEプログラム「死生学の構築」関
連シンポジウムを開催
- 15 大学総合教育研究センター
文部科学省先導の大学改革推進委託事業大
学総合教育研究センター10周年記念・国際
シンポジウム
- 16 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「三鷹市民と三鷹国際
学生宿舎生との集い」開催される
- 17 史料編纂所
日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催
- 18 海洋研究所
防災訓練を実施
- 18 大学院農学生命科学研究科・農学部
分子細胞生物学研究所
自衛消防訓練開催される
- 19 医学部附属病院
先端医療開発研究クラスター(第3回)、第2
回疾患生命工学センター、第2回22世紀医療
センター、第4回医工連携研究会合同シンポ
ジウムを開催

コラム

- 20 さすてなTimes Vol.8
- 21 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.9
- 22 バリアフリーの現場から 第3回
- 23 Flags運動部紹介 No.27
- 24 PCサブリ Vol.1
- 24 調達本部です 第21回
- 25 龍岡門横丁囃 第10回
- 25 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第6回
- 26 コミュニケーションセンターだより No.28

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 26 サステナビリティ学連携研究機構
公開シンポジウム開催のお知らせ
- 27 大学院理学系研究科・理学部
第54回小石川植物園市民セミナーのご案内

募集

- 28 学生部
本年度第2回「東京大学総長賞」の募集に
ついて

お知らせ

- 29 退職教員の最終講義
- 29 保健センター
本郷支所改修工事関連及び休診のお知らせ
- 30 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第499(1月10日)号の発行
—教員による、学生のための学内新聞—
- 30 情報基盤センター
公開鍵認証基盤(PKI)認証局の試験運用
(UT-CAトライアル)のお知らせ
- 31 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”各種コース実施の
お知らせ
- 31 情報基盤センター
“Web of Science新機能説明会”開催のお
知らせ

訃報

- 32 柳田 博明 名誉教授

33 人事異動(教員)

34 広報委員長新年の挨拶

34 EVENT LIST

淡青評論

- 36 グローバル化の中の大学

編集後記

あけましておめでとうございます。今年も学内広報をよろしく申し上げます。今回から新しく、「PCサブリ」という連載が始まり、連載がかなり増えております。増えすぎて読むのが大変だ、という声もありますが、皆様も学内広報を「読む」だけでなく、学内のコミュニケーションの活性化のために、遠慮なく「使って」いただければと思います。その分編集スタッフの仕事は増えていますが、フレッシュな新人が成長しているので大丈夫だと思います★(と)



七徳堂鬼瓦

グローバル化の中の大学

あらゆる分野にグローバル化の波が押し寄せている。先日オランダのグローニンゲン大学の教授が来日し、教育・研究分野での提携の可能性について話し合った。その教授によると、ヨーロッパの大学は、少子高齢化の波の中で、(特に教育面での)国際化に活路を求めているという。しかし、当然のことながらそう考える大学の数は多く、競争は厳しい。国際化のためには授業の英語化が必須である。彼が所属する経済学部では、数年前に教授会の強い反対を押し切って、クラスに一人でも留学生がいる場合は授業を英語で行うことを義務づけた、その結果、留学生獲得の面でもある程度の成果が上がったという。

彼は私の所属する研究科との提携を視野に入れて来日したのだが、英語のみで修了できるようなプログラムが無いということを知って大層驚き、がっかりした様子であった。当面出来そうなのは教員同士の交流ということになる。同様に昨年前半に来日したソウル国立大学の某教授は、われわれの研究科に新設の金融システム専攻に魅力を感じ、学生を送り込みたいとのことであった。しかし、やはり教育のかかなりの部分が日本語だと聞いて、あきらめざるを得なかった。

オランダの教授とも話し合ったが、グローバル化の中で大学がどう生き残っていきけるかは難しい問題である。極端なことを言えば、(もちろん分野次第だが)世界中からごく少数の教授陣を選んでITを活用した講義形態をとれば、他のほとんどの教授は教育面については失職するか、ティーチング・アシスタントになるしかない。

まあそうした極端な姿は当面実現しないだろう。しかし、かなり近い将来に東大が克服しなければいけない課題がここにあることも事実である。

植田 和男 (大学院経済学研究科)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1350 2007年1月17日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課
TEL : 03-3811-3393
e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>